

長崎医学専門学校中国留学生の赤十字隊と「辛亥革命」

見城 悌治¹⁾・坂本 秀幸²⁾

¹⁾千葉大学国際教養学部 ²⁾千葉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程

The “Xinhai Revolution” and the Red Cross Corps formed by Chinese students
of the Nagasaki Medical School

KENJO Teiji SAKAMOTO Hideyuki

要旨

1911年10月の武昌起義に端を発するいわゆる「辛亥革命」に際し、日本で医学薬学を学んでいた中国留学生たちは千葉医専留学生の呼びかけに応え、赤十字隊を組織し、救命活動に従事することを決めた。長崎医専留学生もそれを受け、行動を開始した。長崎は多くの華僑が住まうだけでなく、上海への航路が直接繋がる重要な「場」でもあった。そうした環境において、留学生や華僑たちは、母国の変動にどう対応したのか。また、それに対し、日本の新聞各紙はどのような眼差しを向けたのか。それらを検討することによって、この時代の相互認識を考える上での視角を提供していく。

また中国で医療活動に当たった長崎医専赤十字隊の学生は、「活動報告書」を二度にわたり、長崎医専などに送っている。それらの内容を検討することにより、医薬学生の活動実態や彼らが中国の変動をどう捉えていたのか（たとえば「革命」と認識していたのか）などについて、新しい知見を示していく。

キーワード

長崎医学専門学校、長崎、華僑、千葉医学専門学校、赤十字、留学生、辛亥革命、光復、共和、孫文、黎元洪、中国国民党

はじめに

留日中国学生が「辛亥革命」にどう関わったのかの代表的な研究は、小島淑男氏『留日学生の辛亥革命』（青木書店、1989年）である。その研究を受け、見城は小島氏が同書中で扱った千葉医学専門学校中国留学生による赤十字隊について、その実態や参加学生の卒業後の動向などをさらに考究した⁽¹⁾。またその時の動向に止まらず、20世紀初めから1945年までの間に、千葉医学専門学校および千葉医科大学（1923年に組織替え）で学んだ留学生（中国・台湾・朝鮮など）282名の帰国後の活動などの全貌も併せまとめた⁽²⁾。

戦前期に中国で活躍した元留日医薬学生789名の出身校調査（1930年）⁽³⁾によれば、千葉医専・医大で学んだ中国学生は、154名で第一位だった（全体の20%）。千葉OBが最多になった理由は、医学薬学の修学を希望する留学生の指定校に、1908年からなっていたためである⁽⁴⁾。同校は、15年間にわたり、毎年約10名（医学科8名、薬学科2名）の中国学生を受け入れ続けたため、必然的にOBの数も多くなったのである。

この調査において第二位だったのは長崎医専（医大）の102名、第三位は東京帝大の90名だった。見城は、戦前期日本で医学薬学を学んだ中国留学生の全体像を把握する作業の一つとして、千葉医専留学生に続き、長崎医専・医大留学生についての検討も始めた。本紀要3号で、同校に在籍した留学生239名（中国出身者以外も含む）の名簿を作成し、彼らの入学卒業年次や卒業後の職業についてもまとめたのが、その成果である⁽⁵⁾。

さて、1911年10月の武昌起義勃発時に、千葉医専留学生からの呼びかけに応じ、長崎の留学生も赤十字隊を組織することになる。しかし、その動向についての研究はまだ十分おこなわれていないため、本稿ではそれを課題としていきたい。

まず1章では、見城悌治（日本近代史）が、主に長崎県内で発刊されていた新聞史料4紙⁽⁶⁾ほかを用いることで、赤十字隊を立ち上げた長崎医専留学生の動向や思想を明らかにする。また、長崎港を通過した中国人⁽⁷⁾、あるいは長崎新地（中華街）に住んでいた華僑の動向についても併せて触れ、辛亥革命時における「長崎という場」における中国人の動静、あるいはまた日本の新聞が「辛亥革命」に対し、どのような眼差しを向けたのかを明らかにしていく⁽⁸⁾。

次いで、2章では、坂本秀幸（中国近代史）が、中国に赴いた長崎医専留学生たちが、長崎医専の学内雑誌に寄稿した二つの「活動報告書」の紹介と分析をするなかで、後世の「辛亥革命」観、あるいは「革命史観」とは異なる内容を、当時の留学生たちが有していた可能性について言及する。

1 新聞記事などからみる長崎医学専門学校中国留学生の動向

①千葉医学専門学校中国留学生による「赤十字隊」結成への積極的対応

1911年10月10日、武昌起義が勃発する。それに対し、日本の新聞各紙は強い関心をもつ

て、激動する中国情勢を刻一刻と伝えた。新聞記者たちの視線は大陸の諸情報だけでなく、日本で学んでいた中国留学生にも向けられていく。

たとえば、『長崎新聞』は1911年10月20日付から、三回にわたり、「清国大革命と留学生の態度／火の如き革命思想」という記事を連載した。そこに曰く「本邦に留学せる清国留学生の多くは、皆東京に集って居って、其数約三千二百余人である（略）同じく革命といっても、康有為、梁啓超両氏の唱導して居るものと孫逸仙（孫文——引用者）、黄興の主張して居る者とは全く色どりを異にして居る。（略）三千の留学生中、康氏の立憲君主主義に与するものも数百名は居るが、孫氏の立憲共和主義に賛するものは、其大部分である」云々。この新聞が語るごとく、実際の留日学生は、「立憲共和」派、すなわち「革命派」を支持する者が多数勢力であった。

また、同じ20日付の『東洋』も「長崎の清国留学生」の見出しでその動向を伝えている。曰く「目下長崎医学専門学校には四十人、長崎高等商業学校には二十五人の清国留学生あり」。長崎高商留学生は「多く北清」の出身で、かつ「進級試験」中のため、「東京留学生の如く学業を廃するものなく」とした。また、医専留学生も、革命が起きた湖北湖南の学生が多いものの、欠席せず平常通りの勉強をしているとした。しかしながら、下宿で同輩たちと「高談頗る激越」な議論を交わし、さらに「日本学生を招きて、太白を挙げ（引用者注一「大白（大杯）」＝祝杯を挙げ）、祖国の時事を論じ、夜半に及ぶ事もある」とも報じた。つまり、長崎医専の留学生たちは「平常」を装いつつも、祖国の状況を案じ、かつ同輩や日本人学生と議論を重ねた様子が伝えられたのである。

そうしたなか、10月27日に、千葉医学専門学校の中国留学生たちが、赤十字隊を組織し、大陸で救命活動を行うべきことを、日本で学ぶ医薬留学生に対して呼びかけ始めた⁽⁹⁾。

『朝日』の10月28日付には、「千葉医学専門学校在学中の清国留学生三十七名」が赤十字隊を組織し、「敵味方を問わず、厳正中立を守りて、軍医の職務を遂行せん」との決議をしたこと、横浜・神戸の華僑から寄付金を募るため、学生が赴いたこと、また、「金沢、長崎、岡山、京都、仙台、広島⁽¹⁰⁾、千葉の留学生全部を以て、赤十字を組織することとなり。来る三十一日東京に会合、諸般の打合せを為す」予定が決まったことが報じられた。

長崎医専の留学生に対しても、29日夜に千葉からの電報が直接届いた。『長新』11月1日付は、「△発起者は千葉医専△檄を全国に飛ばす△長崎留学生も動揺」という見出しを付け、「東京よりの檄⁽¹¹⁾に接するや、大いに其趣旨に賛成し、爾来学事を抛擲して登校せず」との状況を報じた。そして30日に協議を行ない、4年の徐樑⁽¹²⁾、3年の斯明、2年生の張楷を、11月2日に東京で開かれる会議に派遣することを決定した。一方、30日午後、「留学生一同は、医専教授の紹介にて、馬町の赤十字社長崎支部に至り、実地を参観した」と意気込んでいる姿も読者に伝えられた。

さて、11月2・3日の東京の会合で決まった内容について、6日に長崎に戻った斯明および張楷は、次のようにまとめた（『日日』11月8日）。

(1) 協議会の模様

清国留学生会館(牛込区東五軒町)で開催された協議会の出席者は、「千葉専門学校生徒を始め、全国専門学校の総代を合せて約六十名」、熱心に議論した結果、留日医学生が赤十字会を組織する事が、満場一致で可決され、「直ちに汪公使の許に報告して、其の許可を得ました」。

(2) 後援会の活動

一日目は、神田の高等演劇場で「東京医学専門学校の留学生を除くの外、東京及び其の付近の留学生六百余名集合」し、赤十字会に必要な講演会の組織を決議した。「今後日本全国に後援会の目的を普及する目的で、近日より各地方を巡回遊説する筈に極まりました」。

(3) 寄付金募集

この「後援会」は主として寄付金募集を目的とする。今のところ、寄付金の「前景気は非常に有望」で、「現に千葉の専門学校では日本の学生から一人前五拾銭宛寄付⁽¹³⁾して下さる事になりまして、我々一同感謝して居ます。此の分に進みますと神戸、大阪、長崎等の在留清人は勿論、日本の人からも多大の同情を受ける事と思えます」。

(4) 出発期は未定

千葉および東京周辺の留学生は、10日に東京に集合する。その他の留学生は11日ころ神戸に集って、一団をなし、「長崎へ参集して、乗船するのは多分十四日頃」の見通し⁽¹⁴⁾。また、「医療機械や薬品、治療消耗品等を買収する事になりて、現に八千円位を注文してあります」。

(5) 会員は130名

留日学生による赤十字会員は約130名で、必要経費はすべて後援会に一任する予定。そして、上海に戻った後は、「伍廷芳氏⁽¹⁵⁾等の事業になりて居る赤十字会と合同して、大々的活動を試みる意気込みです」。

(6) 救護事業の実習

「千葉の専門学校では既に一週間許り以前から、毎日曜日も休みなく、毎日午前八時から午後四時迄救護事業の実習をやって居ます⁽¹⁶⁾。全国の専門^(門)学校は勿論実習いたしましょうし、長崎でも近々より出発当時まで、百般の実習を為すつもりです」。

この集会に参加していた長崎医専4年の徐樑は、一足早い5日に長崎に戻っていたが、彼の発言も残っている。上記と一部重複するが紹介しておこう。すなわち、赤十字団の「組織会」は、清国公使汪大燮が会長に就き、留学生監督胡が尽力した結果、「在日本の医学生は全部団員たる事に決し」た。また「公然と聞きたる次第にはあらねど、文部省にても暗に賛助されつゝ在る趣」で、各医学校には、汪公使から学生たちの一時休学を申請することになった。同団の経費は、1 留学生の留学官費をとりあえず流用、2 医学以外の留学生が組織した後援会の醸金、3 留日華僑などからの寄付金(「千葉県にては既に二百数十円、横浜にては二千数百円其他各地方より続々寄付の申込もあれば、相当の金額

には上るべき見込み)、4 上海到着の後、伍廷芳等が組織している赤十字団と共同し、「経費の如きも共通せん予定なり」(『日日』11月7日)。

以上のように、留日医薬学生たちは「中立」を旨とする赤十字隊を組織することとしたのだが、当時の留学生の多くが「革命派」支持と見なされていた記事を先に紹介した。他の事例も挙げれば、『東洋日の出新聞』11月2日付は、留学生を次のように評した。長崎「医専高商の留学生は全部漢人なるを以て、何れも革命軍の必勝を期し乍らも、故国の戦況を案じ、新聞の電報を鶴首して待ち、革命軍の勝利若しくは新たに起れる報を得れば、飛び上がって喜び、勉強も手に付かぬばかりの有様」である。ある留学生は「東洋日の出新聞を取り出して、一々電報の真偽を確かめ、手拍て悦び、満人は漢人が不俱戴天の仇なり、今日の事あるは、即ち天の理数にして、革命軍は制せんと欲するも止むべからざる」。さらに、東洋日の出新聞社の近くに下宿していた留学生が、「御社に近いお蔭で日々の戦報を早目に知るを得るが、何よりの幸にして、每晚明日の新聞を耽読するのが、無上の楽みなり」と語ったと書き、自社の報道が、留学生の心を躍らせていることを自賛さえするのであった。

ちなみに、『東洋日の出新聞』は、革命派を応援する姿勢を当初から有していたとされる⁽¹⁷⁾。そのため、他紙以上に、中国留学生に対する密着取材をしており、そのため、同紙はきわめて貴重な歴史史料を残すことになる(それについては、2章で詳述する)。

さて、留日学生たちの本音が「革命派」支援にあったとしても、「赤十字隊」を組織する意義をアピールし、それに基づいた支援を日本社会から求めていたことは事実であった。のちに長崎医専赤十字隊のリーダーの一人となる蔣志新(当時2年)は、記者のインタビューにこう応じている。「我々医学に志す日本留学生は百八九十名にして、今回の変乱に付、赤十字軍を組織し、同朋の救済に努めん」とした上で、「我々医学生は官軍にも且革命軍にも偏するもの非ず。極力同胞の救済に従事せんとするものなり。且某々新聞紙上に於て、我々学生が時局の為め、学業を放擲して迄、東奔西走しつつあり云々、とあるは事実相違なり」(『日日』11月2日)。

留日学生が赤十字を組織したいという希望は、清国公使館を通じ、本国政府にも伝えられ、10月29日に「許可する」との電報を得た。また、神戸華僑の大立者・呉錦堂等から、7万円の寄付があったのを始めとし、「予定以上の資金集りたるより、留学生の満足一方ならず」(『長新』11月2日)と、計画は順調に進んでいく。

11月2日には、留学生十余名が、ふたたび長崎赤十字支部を訪問し、救護材料や救護班の組織について説明を受けている。また大村・長崎の両衛戍病院に赴き、「救護材料の一覧を求めた」。しかし、これは「軍事上の関係より、之を謝絶された」とのこと。一方、長崎医専では、「特に清国留学生の為に赤十字の救護に関する講話をなしつつある⁽¹⁸⁾」等々の状況が詳細に報道された(『九州』11月5日)。

11月6日付『長新』には、赤十字隊組織の発起者となった千葉医専のOBである王琨芳および在学生呉和⁽¹⁹⁾が先発隊として、長崎港から上海に発つ前に取材を受けている。日

く「今回の計画は、我が祖国の為、国民の義務、殊に医術を修めたる者の当然の職務」である。赤十字隊の「人員は確定せざるも約百名位の積にて、中には十四五名の女学生もあり。外に日本の熟練なる医師二名、看護婦四五名も傭聘同行の筈なり」云々。

長崎港を発つ千葉医専関係者2名については『東洋』も報じた(同日)。そこには、当面必要な資金1万5千円は留学生の学資の一部と京浜地方在留華僑の義捐によって集まった。「遅くとも此処一週間の後には、全部出発の運に至るべく(中略)今後十万の義金を集むるは、已に成算あり」とした上で、「吾等は日本のお蔭で修得せし技能を以て、郷土の為に医学生たるの天職を尽さんの一念のみ」と、日本への謝意などを力強く語る様子が報道されていた。

11月7日付『長新』の「救護団なる」の記事は、東京では準備万端ととのい、長崎医専留学生30余名を除いて、「在京二百余名に千葉医専学校長の尽力に依り、特に同校附属病院より、看護婦十数名と共に愈々来る十日東京出発、戦地赴渡の途に着くべき由」と伝えた。また長崎に戻った徐樑からの情報として、「当地医専にては、全留学生四十三名中病氣其他万已むを得ざる留学生を除きて、他三十名は挙つて同会員となり、赴渡すべき由」であるとした。さらに、長崎医専留学生たちが、11月5日以来、長崎の「同胞に分頒して、同情を求め」た「義捐金募集状」の全文も以下のごとく掲載されていた。

同学等は平生医業を以て業と為し、慈悲を以て心と為せるものなり。故国の風雲を望み、同胞の疾苦を痛むの余、日本留学の各医学校生徒諸君と赤十字会を組織し、将さに戦地に赴いて、聊か微願を施さんとするなり。唯た同学等資力に乏しく神戸の呉錦堂君巨資を恵まれ、汪公使亦慨然賛助を与えられたりと雖も、規模草創に際して、収支相償う能わず。此れ諸公の義捐に求めざるべからざる所以なり。諸公は海外に僑居し、飽くまで文明を覽るものなり。此同胞助を呼ぶの時に当り、同学等が救護の苦力憐れんことを云々。

②長崎医専留学生の出発と見送る長崎の人士たち

長崎医専留学生たちは、11月16日に長崎港を発つ。その経緯については、『東洋日の出新聞』が詳細な記事を残している。まず、同日付の「医専留学生出発」の内容は大略以下であった。

14日になり、東京の清国公使館の汪大燮から「渡航費などが必要な者は至急申し出れば支弁する」と連絡があったが、「皮下熱血湧き切りに脾肉の歎に堪えず、夢は夜々に中清の天地に逍遙るを」楽しみにしている留学生は、「今から書面で東京迄往復する杯、呑気千万な事が出来るものか」と憤慨。しかし、このような場合を想定して、長崎新地(中華街)の源昌号主・蘇道生から600円を借りる約束をしており、16日に出発することに決した。

新聞にはこの日出立した留学生29名⁽²⁰⁾の名前があるので、挙げておきたい。

胡澄、肅世規（蕭也規）⁽²¹⁾、朱榮錦、劉輔定、斯明、金体選、田丙午、林維周、周育（周培）、戚学綢（戚学綉）、陸宗翰、陶鑄、鄭鳴鎮、張楷、徐梁（徐樑）、丁維駢、蔣志新、李寿康、周軍声、馮祖昭、薛光創（薛光釗）、蕭蔚霞、趙翰思、蔡東賢、陳憲、趙鑄、劉炎、江衡。

これらのうち、胡澄・周榮錦は幹事、蔣志新・張楷は書記、馮祖昭は図書係、劉炎は会計の職務をそれぞれ担当したとされる。

そして、留学生への餞別として、長崎医専の教職員および日本人学生が合計150円を渡してくれたため、蘇道生から借りた600円に加え、都合750円の現金ができた。29名のうち、10名ほどはこれまで受けていた学資が残っており、補助を必要としなかったため、残りの20名に30円ずつ渡し、下宿代などの清算をすべて済ませた。また、本日（16日）午後に長崎医専の教職員や学生が送別会を開く予定である、云々。

この日の記事は、上記に加え、長崎華僑の蘇道生の働きかけで、上海までの船賃を2割引にすると、日本郵船が決したことを紹介した上で、「昨夜迄に東京其他より来崎せし清国留学生多ければ、本日出発の筑後丸船内は、沸き返るばかりの大賑なるべく、元気の盛なる、譬るに物なけん。往け青春の健男子！！」と結ばれた。

翌17日の『東洋日の出新聞』は、「支那学生団の帰国を送る／医専校庭の告別／筑後丸船上の万歳」の見出しを掲げ、さらに詳しい記事を載せている。

「懐かしき学校に最後の別れを惜まんと」、正午過ぎに留学生は集合した。そして、午後一時から、田代正校長が、留学生に向け、次の訓辞を与えた。

「諸君が故国に事あるの今日、奮って赤十字隊に加盟せるの至情掬するに余りあり。已に名を赤十字と云う。行う処は人を救うの仁術にあり。須く自重して、以て一視同仁人道の為に尽すを得ば、諸君の満足のみならず、本校の名誉なり。諸君能く身を保て。余は諸先生等と共に、再び此校庭に諸君と相見の日、近からん事を望む」。

次に村上安蔵博士が、金一封を、留学生総代張楷に渡し、「是はこれ単だ諸君の出門を携ふ草鞋銭のみ」と伝えた。続けて、在学生総代4年生佐多浦美翁による「其音時々慄えたり。所謂泣いて壮士の行を送るものなり」と記者が感動した送別の辞が行われた。「多年机を並べたる留学生諸君が、赤十字隊を組織して、本日上海に向われんとするを送るは、吾等の歡ぶ所なり。希くば本校に学びし処を以て、人道の為に勇ましく尽されん事を望む」と述べ、「其額少けれども」と金一包を餞別として渡したという。

それらの送別の辞を受けたのち、張楷が「流暢なる日本語」で、次の謝辞を述べた。「多年の薫陶と指導を恭うせし、校長諸先生並に同窓諸君の厚意謝するに辞なし。今故国変乱の爲めに出発せんとするに当り、多大の餞別に預るに至る。御芳志は生等の死すとも忘れざる処、上海著⁽²⁷⁾の上は恐らく一同武昌に向うべく、部署定まらば力の限り尽すべし。希くば意を安ぜられよ。若し夫れ革命戦終るの日は、直ちに來って再び此校庭に楽しく諸君と談笑せん」。

挨拶する張楷の表情について、「極めて慎まやかに述べる時、其眼に涙は湛えられ、感謝と決心の色交々面に見われたり」と、記者は記録した。

式次第がすべて終わり、解散になろうとしたその時、「東洋日の出新聞」記者が前に進み出て、「社同人を代表して送別の辞を述べ」という行動を取ったらしい。その後、留学生たちが「衆異口同音に、必ず粉骨碎身事に当るべきを誓」って、校庭での送別会は終わったとされる。その後、全校生徒と教職員の一部は、留学生とともに波止場に向う。そこには、長崎清国公使館の楊領事と華僑たちも集まっており、それぞれが告別の挨拶を行った。

記者はさらに船に乗り込み、取材を続ける。曰く「記者も一行と共に団平船に乗り移れば、送る者送らるる者、一斉に唱えし万歳の声破るるが如く、漕一漕漸く相離れつつ、互に高く帽を振る」。船には、他校の中国留学生の便乗者がすでに97名あり、また長崎で搭乗した日本人客約40名を合わせると、三等室内は全く隙間がないほどの混雑であったという。

記者が陸に戻るため、甲板に出ると、留学生代表として幹事の胡澄が挨拶をし、さらに「記者の乗れる舢舨が徐ろにタラップを離れるるや、舷上声あり。仰ぎ見れば好男子張楷君なり。音頭を取て叫んで曰く、東洋日の出新聞社万歳、と一行亦た之に和して、之を三唱する時、手に手にハンカチ帽子翩翩たり。嗚呼、熱血躍る健男兒等！、我が同人が諸君の行を歡ぶの情や甚だ切なり」と書いた。

長崎の他の新聞社もこの日の出発についての報道をしているが、『東洋日の出新聞』ほどの密着取材はしていない。記者自身の感情が入り込み過ぎている嫌いはあるが、とにもかくにも臨場感溢れる記事にまとめることに成功していると言えるだろう。

この日の記事は、まだまだ続く。曰く、当初は27名がこの便で発つはずであったが、やむをえない事情により延期者が出て、23名になったこと（残りの留学生も次便で出発する予定とのこと）。「赤十字隊組織の主張者たりし千葉医専留学生」38名は、清国大使館の不備などから金策が間に合わず、先便の春日丸、また昨日の筑後丸にも乗船できず、「日本全国に於ける支那医学留学生団中、長崎医専が其先発」となったことなどである⁽²²⁾。

さらには、「日本赤十字社よりの救護班」が、この船で出発した事も報じている。班長はじめ委員3名、調剤師1名、書記1名、通訳1名、看護長ほか2名、看護員25名など、計33名の編隊が乗船。薬品器具のほか、70～80名を収容できるテントも用意していた。そして「漢口に本部を置き、両軍の傷病者を収容し、さらに必要とあらば第二班の出発を見るに至るべしと云う。因みに長崎支部長安藤知事は夫人と共に本船を見送れり」が、長い長い記事の結びであった。

つまり、『東洋日の出新聞』による長崎医専留学生出立の記事は、壮行会や出港までの様子を詳細に描いたのみならず、長崎医専赤十字隊の行動が、より上位の赤十字団体の活動などともクロスしていることを自覚的に示そうとしていた点にも特色があったと言えるだろう。

③長崎を経て上海に向かう中国留学生たちの諸相

『長崎新聞』11月17日付には、長崎医専生が搭乗した筑後丸に、東京高等師範、東京高等商業の留学生その他144名が乗船していたとある。このように当時長崎で発刊されていた新聞各紙は、この前後に長崎港を発った留学生を含む中国人関連記事がきわめて多く掲載されている。それらの一部をここで採録紹介し、長崎港（および同地の新聞社）が、そうした方面について、いかにたくさんの情報を提供していたのかを知る一助としたい。

まず、「瀬戸内海上の革命旗」（『長新』11月12日）は、バンクーバーを発ち、横浜を経由した英国汽船エム・ジャパン号が神戸港を離れるとまもなく、488名の中国人（「多くは労働者、小商人にて中には学生と思しき者二十余名」）が爆竹を鳴らし、「革命旗」を揺らし、快哉を挙げたこと、また一人の男が大きなタライを人々の中央に置くと、たちまち1,700円もの募金が集まったことを伝えた。さらには「神戸より入港の春日丸にて百五十余名、上海に向かう筈」（『長新』同月13日）、「長崎高等商業学校在学の清国留学生も、漸次祖国に向って引揚ぐる模様あり。（中略）在京清国留学生も旅費の才覚つき次第、帰国することとなり、先発として、早稲田其他の在學生十七名及び英和女学校其他の女學生三名は既に京地を出発て、門司に到着し、内八名は来崎して、大浦四海樓に投宿中」（『日日』同月15日）などの記事が掲載された。

また『九州日之出新聞』の11月14日付は、「清国留学生帰る／革命黨員船中の演説」との見出しの下で、詳細な報道をしている。「清国人の続々相踵いて帰国するもの漸く其数を増せり」。昨朝九時、上海に向かう途次、長崎に寄港した春日丸には、清国留学生が135名乗船していた（横浜から91名、神戸から33名、門司から11名）。そして、そのなかに一人、米国在留歴が長い「革命軍の総指揮官たる黎元洪唯一の股肱の臣」⁽²³⁾である革命黨員がいた。彼は、船中で留学生たちへの働きかけを強め、「学生中意志軟派の者には、一層其意気を強め、強派の者には愈々意志を強固にし、以て帰服させんとする等、其手段頗る巧妙にして、学生の意気為に昂然たり。彼が堂々たる演説をなす度毎に、革命軍の成功を祝し万歳を叫ぶ等、船中に於ける彼等の意気頗る旺盛を極め居れり」の状況となったと伝えた。

20日に寄港した筑前丸には、革命軍に投ずるべく「憤然蹶起した」横須賀海軍砲術学校卒業生33名および同校学生11名、海軍機関学校在學生5名、鹿児島第七高等学校在學生3名（同校総数15名のうち、10名は先便にて帰国）、金沢第四高等学校在學生1名、山口高等商業学校生2名、都合55名が乗船していた。「一同血湧き肉躍るの青年なれば、何れも眉を昂げ腕を撫して、故国の風雲を慷慨し、一同の活気は満船を圧するものありたり」との状態であった。そして、長崎港で一時下船した学生たちは、「支那料理店四海樓⁽²⁴⁾に繰込み、革命軍の勝利を祝する前祝いの宴会を開き、同志を鼓舞する悲憤激越の演説等あり。斯くて乗船時刻迫るや、一同乾盃後、革命軍の万歳を三唱し、勇気凛々として筑前丸に引揚げ」たという（『東洋』同月21日）。

11月28日付の『長崎新聞』は「学生七十五名の決死隊／革軍に添える一勢力」の見出しを掲げ、27日に出港した山口丸に、革命派に身を投ずる「決死隊」を組織した東京の各学

校留学生75名が乗船していた由を報じた。そこに挙げられた学校名は、士官学校、早稲田大学、商船学校、中央大学、法政大学、明治大学、高等工業学校、正則英語学校、成城学校、物理学校、志成学校、鉄道学校、高田騎兵七連隊付実習生、陸軍測量学校、東京高等商業学校であった。

同じく28日の『九州日之出新聞』は、27日に寄港した筑前丸には、清国留学生146名が乗船しており、ほとんどが制服制帽にて、所属校は帝国大学、慶応、早稲田、東京高商、東京高工が主体だった。前数回の帰国学生に比べると、航海中は静粛だった。しかし、「寝室の上に錦地に作られたる小さき革命旗、水色にして九曜を形取れる革命軍旗等を吊して、頻りに悦に入り、何れも意気昂然たり」であったという。なお、この記事には、これらの小旗は既に京阪地方で販売されており、「帰国清人の為め売れ行き頗る好況なり」との補足もなされていた。

また同じ27日に入港した弘済丸には、二等に11名、三等に148名の中国留学生が乗船しており、「彼等の常として大言壮語、汪公使を罵倒するもの、黄龍旗を軽蔑するもの、満廷を批難するもの等、喧々轟々革命の気、室内に溢るるを見たり」（「清国留学生の帰国」『日日』11月28日）という状況であったという。

さらに同船と前後して上海に向かった山口丸には、士官学校生で高田騎兵連隊所属者が1名、明治大学27、高等工業4、同文学院11、東京正則英語学校5、早稲田4、物理学校3、成城学校・鉄道学校・研数学館・高等商業が各2名、さらに法政・中央・日本の各私立大学、商船学校、農科大学等で学ぶ者、計82名が便乗していた。そして、「三等室の入口は言わずもがな、室内天井となく壁となく、白布を左腕に巻ける兵士が革命軍旗を捧げつつ、邁進する造り物を飾り、喋々嘯々意気壯ん」であった。ある者が「無論革命軍に投じ、各学校の制服制帽其のまま、敢死隊を組織」と述べたのを聞きつけた記者が、「銃剣なしでは、敢死隊も組織されざるに非らずや」と尋ねると、「持ち行き度きは山々なれども、さすれば必ず日本の御迷惑となる様な間違でも起らんには、留学の大恩と同情の厚誼を仇で報ずる事とならんを恐れて、素手で行くなり」と答える者が多かったという。この記事の最後は、「因みに長崎高等商業学校の留学生中には、已に帰国せるもあるが、残れるも近頃全く登校せず、来月初めには残りなく帰国すべし」という長崎在住留学生情報で結ばれていた（「革命党留学生」『東洋』同月28日）。

以上、当該期の中国留学生の動向に関わる記事を多く紹介したが、これがすべてではなくまだまだある。これらの状況は、中国（学生たち）の行く末に日本社会が多くの関心を持っていたがゆえに、新聞社も情報収集を競っていたと理解してよいのではないだろうか。

④日本の赤十字社と中国赤十字社の動き

留学生の赤十字隊が、中国の赤十字社との連携の下で動く由を、11月2・3日に留学生たちが集まって決めたことは既に紹介した。そこで、長崎の新聞各紙が中国や日本の赤十字社の活動をどう伝えていたのかも、ここで紹介しておきたい。

まず、「赤十字社 救護団渡清」という記事を掲げたのは、『長崎新聞』11月17日付である。16日午後4時、上海に向け出立した筑後丸には、日本赤十字社救護班の一行34名が乗っていた。最終目的地を漢口とする団員は、「陸軍戦時武装」のいでたちをしていた。記者から「設備は如何ん」と尋ねられると、漢口では家を借りて「病院的设备」をなす予定だが、市街が焦土になっているらしいので、場合によっては「天幕生活の必要」あるかもしれない。しかし、「約百人分の救護材料は勿論、食器、寝具、衣類等を携行し、食事其他に至るまで、一切本団にて給与する積りにて、コック三名も一行中に加え居れり。兎に角病傷者の治療救護に従事すといえ、何事も無き様なれど、内面は宿屋兼業なり。決して尋常一様の事に非ざるべし」と説明したという。

この記事の最後には、「△留学生救護団 千葉医学校留学生救護団の事に関しては、新聞記事以外には承知し居らず。不完全なる治療を施すのみなれば、別に何等の苦心もなかるべし。然かし、完全に救護の実を挙げんとすれば、夫れ相応の準備を要す。従って、出発も手間取べし」とあり、医学生主体の赤十字隊も、赴く以上は十全な準備をしていくべきことが示唆されていた。

この筑後丸が上海に到着した後の記事も掲載されている。「日本赤十字救護団一行は、去る十八日筑後丸にて来着せり。当地の中国紅十字会理事沈仲礼氏は前きに武漢の事起るや、一部の医隊を組織し、革命軍及び官軍の負傷兵を救護する所あらんと欲し、目下漢口に事務所を設立」していたが、今回の日本赤十字社救護団を歓迎する（「救護団歓迎会」『長新』同月25日）。

一方、この時、中国紅十字団は、上海駐在有吉総領事に対し、自らの組織を完全にし、事業の成功を図るため、日本赤十字社から適当な人を招聘したいという希望を提出した。それを受けた内田康哉外相が、日本赤十字社に交渉した結果、同社の常議員兼外事顧問・有賀長雄を派遣することに決定する（「紅十字と有賀氏」『日日』11月19日）。

これは上海紅十字会長沈仲礼氏の招聘に応じたものであったが、まだ不完全な組織を、今回の「動乱を機として」、完成させたいとの意図が背景にあったとされる。そのために有賀は上海に1週間ほど滞在し、「組織上の説明其他資問をなす」予定である。なお、有賀は、たまたま上海行の船（博愛丸）に同乗していた「清国医学留学生より成る救助団の主なる数名に対し、船中にて救護団及び救護に関する講話と注意とを与え」たため、留学生が非常に喜び、いろいろな質問を受けたという。これらの学生救護団は千葉・東京・名古屋・京都・大阪・岡山の各医学専門学校在學生であり、その他に、横須賀海軍砲術練習所卒業生3名、女医学生9名等、計259名であった（さらに長崎から留学生20余名搭乗の予定であった）という。（『長新』同月24日）。

この有賀長雄が12月7日、中国から戻った際の談話が、「有賀博士と語る」として『長崎新聞』12月8日付に掲載されている。

日く、目下の救護事務は、漢口と上海の二ヶ所で行っている。鎮江にも救護所を設け、南京周辺の病傷者は、鎮江で一時手当をし、上海に輸送している。80名前後の病傷者を取

容しており、毎日一回鉄道に救護列車を運転している。日本にもないような完備な組織を持っていることに敬服している。また、病院もこれまでの建物は分院として、本院は大規模なものを建設中である。病院の状態も行き届いており、現在でも優に100名を収容できるのだが、新築が完成すれば、さらに300名以上を収められるだろう。また、中国での救護事業と資金は、日本の赤十字社組織と同じく、一般の慈善心に訴えること、政府の補助やその他の醸金によって、維持している。救護慈善の思想がいまだ一般的でない清国において、現在の規模設備を保っていることには、総理以下幹部の熱心な尽力の結果であると信じている、云々。

有賀の談話は、自らの（日本側の）仕事ぶりを誇るといよりは、中国の諸設備や関係者の尽力を高く評価しており、そこに対等性や中立性を看取できるように思える。

⑤辛亥革命勃発に関わる在日華僑および日本社会からの視線

上海を直接に結ぶ長崎港を有していること、華僑が多く住んでいたことなどから、長崎で発行された新聞の辛亥革命前後の記事は、興味深い内容に溢れている。ここまでの叙述の分量が嵩んできたので、以下は、簡潔に示すに留めたい。

A 留学生相手の商売人に痛手

留学生の多くが、革命勃発により帰国したことは、留学生相手の商売をしていた日本人にとって、痛手となった。とりわけ、その大多数が住んでいた東京では、「下宿屋初め料理屋雑貨店等、凡そ是迄留学生顧客とせし向々は、何れも掛けが取れず、幾人も数月間養いし下宿屋など根太板が持てぬ程に困れるもあり。殊に滑稽なるは贅沢な留学生に金を貸付けて、暴利を貪る高利貸も少からず、清国留学生大明神様と拜んで喜び居りしに、今日では利息は愚か元金迄も取れそうになきより、青息吐息の者もあり（「曖昧な汪公使／滑稽極まる高利貸」『東洋』11月23日付）という恐慌ともいえる状態に陥ったという。

日露戦後に留学生数は急増し、1万人を越えたが、そのほとんどは東京に集中していた。予期せぬ政治変動で、商売人が一喜一憂することがニュースになること自体、留学生の存在が無視できないものになっていた証拠にもなるだろう。

B 辮髪を切る華僑たち

長崎市西浜町精洋亭で11月25日に開かれた集会では、当日「断髪、国旗、紅十字会寄付金」などが議題となった。長崎新地などに在留する中国人は約1,000名で、その半数は断髪していたが、この機会に残りの全員も断髪することに決した（「断髪の決議」『九州』11月28日）。

清朝の風俗であった「辮髪」をめぐる動き⁽²⁵⁾は、この前後のすべての新聞に何らかの形で掲載されることになる。

C 華僑による軍資金の醸出

「我国に在住する清国人中には、一人にて数千万円の財産を有するもの尠らざるが、分けて横浜の郭崎陽、神戸の呉錦堂、広生祥の如きは、優に二千万円以上の豪商にして、皆

漢人出身になれば、此際祖国の為め軍資金を出資せんと企図しつつあり」。そして横浜では軍資金として2万円、紅十字社費としては5,000円、神戸では紅十字社費として、呉錦堂が7万円の出資を決めた。また、長崎では紅十字社費として2,000円の醸金がまとまった。（「革命軍資金募集」『日日』11月28日付）。

「市在留清人の談によれば、軍資金の神戸市在留清人に依て募集されたるもの六千円、横浜市は五万円、長崎市は四千八百円。而して神戸在留者にては、革命軍政府の発行したる公債を五十万円程引受たり（「革命軍の軍資金」『日日』12月6日）。

先に11月12日付新聞記事を引用し、カナダ在住の華僑が、横浜神戸を経て帰国する際、船上で募金集めをしたところ、たちまち1,700円が集まったことを紹介したが、世界各地に住まう華僑たちの多くは、「軍資金」を醸出することを惜しまなかつたようである。

D 中華街での革命成功祝賀会

一方、革命派の「勝利」が決まったとされた12月10日には、長崎新地（中華街）で、祝賀会が行われることになり、市内のどの新聞も数日前からその様子を賑やかに報道した。

『長崎新聞』12月8日付は、「提灯の先きに付ける革命の小旗は二千余流、此程全く出来上り、既に各戸配布せられたる由（略）辮髪散髪の支那人が事あり気に奔走し、頗る活気を帯び居れるが、提灯行列当夜を待ち兼ねたる小児は昨今既に、革命の小旗を手手に振り翳して、遊戯をし居り。昨日午前の如きは十一二を頭らに七八才の小児十数名、襟に革命旗を挿し、小自転車行列を為しつつありしが、何れも日本に生れ日本に育ちたる事とて、支那語より日本語が達者にて、家大人や阿兄が一生懸命日本語にて練習中の軍歌、矢弾の霰を潜りつつ／友の屍を踏み越えつ／満奴を追うて城門に／樹てた我等の革命旗／中華民國万々歳／中華国民万々歳 を節面白く謳いつつ行く有様勇ましなると言う」という状態であったという。

そして、その後も「仮装提灯行列／挽物は軍艦と大砲」（『長新』12月9日）、「革命旗翻る居留地／共和漢国」（『日日』12月11日）など、10日に華僑たちが行った街頭での祝賀会をそれぞれ詳細に伝え、華僑にとって「革命派」の勝利がいかに喜ばしいものであったかを、読者に伝えるのであった。

なお、実際の「革命」の推移に即せば、11月30日から、各省都督府代表連合会による会議が開催され、臨時政府を発足させるための「中華民國臨時政府組織大綱」が採択されたのが、12月10日であった。実は、その時、まだ清朝皇帝は存在していたのだが、長崎の華僑たちは、日本の新聞報道を受けて、「革命派勝利」と理解したものと思われる。

E 残留中国学生への経済支援

長崎に視点を置くと、人の動きは目まぐるしく、すべての留学生が帰国したかにも見えるが、東京府下では引き続き修学を続けていた学生もいた。そして、混乱のなか、経済面で困却する学生が生まれたのだが、それを何とか救おうとする動きも現れた。

「残留せる数百名は官私立学校在籍者にして、官費生は全部学資杜絶し、私費生の幾分も故郷との通信杜絶し、学費を得るに途なく、其窮乏甚しく、進退谷りたる」（「留学生救

助」『日日』1912年1月13日) ことを受け、それに「同情し、洪沢、高橋、近藤の各男(などが一引用者) 発起となり、支那留学生同情会を設け、(中略) 左の規約の下に学資を貸与すべく、既に行く二十八日迄に、合計約四万五千円の寄付金を得たりと云う」(「支那学生同情会活動」『東京朝日』1912年1月1日)。

この時、日本に残った留学生は400~500名であったとされるが、財界関係者などが創設した「支那留学生同情会」によって、東京府下を中心とした47校の344名が、学校の推薦により、貸与を受けている。のち、貸与金の75%は同情会にきちんと返還されており、日本側の友誼に誠意をもって応えた父兄が多かったことが分かるのである⁽²⁶⁾。

以上、本章では、長崎医専留学生の動きを中心に、日本で学んでいた医薬留学生(あるいは革命派を支持した留学生)、また長崎華僑の支援などの様相を、長崎で発刊された新聞記事から確認してきた。

かつて、見城は千葉医専留学生の赤十字隊結成が周辺の人々に大きな関心をもって受け止められたことを明らかにした。たとえば、千葉医専留学生赤十字隊への帯同を志願する日本人が数度にわたり、下宿に押し掛けたこと(留学生側はそれを断ったとされる)、東京の留学生たちと合流し出発する時に、日本橋の三越呉服店に立ち寄り、三越から「日頃のご愛顧に感謝し、また活動の成功を祈念するため」として茶菓の饗応と記念写真撮影のサービスを受けたことなどである⁽²⁷⁾。「留学生同情会」の誕生も、そうした「支援」の一環と言えるだろう。

一方、本章は「長崎という地域」の動向に注目してきたのだが、在日中国人をめぐる動きは、東京に勝るとも劣らないものがあつた。これらの状況をより広く捉え直すことで、当該期の日本社会が有していた中国に対する様々な視線が確認できると思われる。

2 長崎医学専門学校中国留学生の赤十字活動報告とその特質

①長崎医専留日学生たちの活動報告

本章では、長崎医専留日学生が、実際に中国でどのような活動をしたのかを見ていき、その歴史的意義を考察していく。すなわち、中国に赴いた留学生たちは現地での活動報告を、二度にわたり長崎医学専門学校などに送り、それが同校が発刊していた『研瑤会雑誌』に掲載されることになる。これらの「報告」は、「辛亥革命」の進捗について、留日中国学生たちが実際に見聞した内容を率直に記載しており、歴史史料としてきわめて貴重なものと思われるが、管見の範囲では紹介されていない。よって、本章では、その意義について触れていくこととする。

なお、この史料は、一つが日本語、一つは中国語で『研瑤会雑誌』に掲載されていた。そのため後者については、筆者(坂本)が日本語に訳したものを掲げることとする。

さて、「報告書」を見る前に、『研瑤会雑誌』に掲載された関連史料をもう一つ紹介しておきたい。上海に発つ長崎医専留学生に対する壮行会の状況については、既に『東洋日の出新聞』11月16日付を用い、1章で紹介した。しかし、『研瑤会雑誌』（第103号：1911年11月31日発行）にも、その時の模様が、簡略ではあるが、紹介されている。よって、それを以下に採録しておきたい。

清国留学生訣別式

革命軍の奮起は世界を驚かした。彼等は着々其武歩を進めて、巴峽の天地には金鼓の響絶ゆる時なく、四百余州の大清国は將に危機一髪の境遇に居る。戦闘は必ず幾多の死傷を出し、病者を生ずる。然も官軍乃至革軍に充分の救護組織なき為に、不幸に倒るる軍兵の数も従て多い。吾国に留学せる清国留学生は之を座視する能わずとして起った。我が医専在^(ママ)学生も決然起って、赤十の旗を擁して、弥々十一月十六日戦乱の故国の空に向う事になった。薄曇った午后零時半。健気なる留学生諸君は、学生の拍手に迎えられて、入場。各席定まるや、校長は懇篤なる訣別の辞を述べ、学生総代佐多浦氏の別辞あり。釀金を贖として贈り終れば、留学生総代張君は流暢なる日本語にて答辞を述べ、之にて式を閉じ、全校を挙げて、大浦迄見送った。「万歳」「確つかり」などの声と共に、彼らの船は日本の土地を離れた。午后四時郵船筑後丸は熱血漲る三十の中華健児を載せて、上海に向った。

②長崎医専留学生赤十字隊の記録 その1（1911年11月28日から12月29日まで）

まず、長崎医学専門学校『研瑤会雑誌』第104号（1912年1月31日発行）、77～80頁に掲載された「留日長崎医学専門学校中国赤十字団報告書」から紹介していく。

この「報告書」については、重要な補足がある。すなわち、これとほぼ同じ内容の「報告書」が『東洋日の出新聞』1912年1月7日付で掲載されていることである。同紙には「長崎医学専門学校支那留学生の一团が、客年十一月十六日当港出帆の日郵筑後丸にて、留日学生最先の赤十字隊を組織し、上海へ向け出発したる光景は、其翌日十七日の本紙に詳記せし処なるが、本社は昨日同団書記蔣姓より、同団が南京攻撃戦に活動せる左記の報告に接受せり。即ち、報告書のまま掲げて、以て在留支那人士並びに同団に志を寄せられたる本邦人士に似す」という前文が付けられていた。

そして、雑誌と新聞にそれぞれ載せられた「報告書」を対照すると、文意が異なるほどのことまではないが、差異が多々見られる。よって、以下の史料紹介では、雑誌に載せられた文章を「原文」とし、それと異なる新聞紙上の表記を〔 〕で示した。

なお、この差異がなぜ生じたのかは不明である。留学生が、新聞社と学校に同じものを同時に送ったのは間違いないように思われるが、それぞれが活字に起こす際に、誤植が生じた、あるいは許容範囲と判断し、適宜手を加えた等の類推もできるが、詳細は分からない。さらに、ここまで見てきた「東洋日の出新聞社」の辛亥革命に関する積極的な報道姿

勢から、同社が留学生に対し、「報告記事」を送ってくれるよう、離日前に依頼した可能性もあるかもしれない。しかし、いずれも想像の域を出ないため、贅言は控え、史料紹介に入りたい。

なお、長崎医専赤十字隊が歩んだ行程を、図1として示しておく。

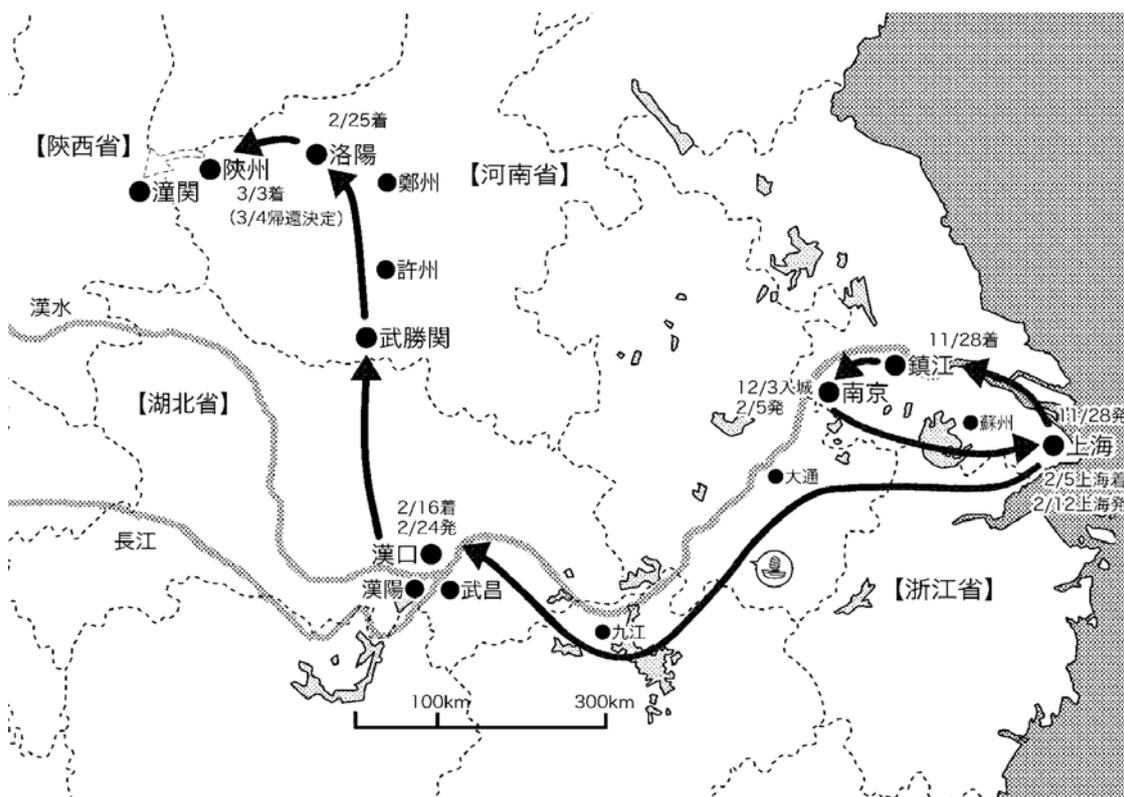


図1 長崎医専赤十字隊の行程

留日長崎医学専門学校中国赤十字団報告書

本団は、上海に到着〔著〕したる後に、数日間滞在し、其間に留日大坂〔阪〕高等医学校全体と合併して、一団となり、其〔我々の〕経費及薬品器械〔機械〕等は、上海の中国赤十字社担任す〔し〕。故に一名赤十字社と云えり〔云うあり〕。先ず全部団員中に、大坂〔阪〕高等医学校卒業生なる蔣可宗君は医長とし、岡山医専学校〔医学校〕卒業生なる韓興〔君〕副医長とし、臨床前学紀学生胡澄・田丙午等諸君〔及大坂高等医学校の四年級生諸君を〕医員とし、金〔全〕体選・戚学綉〔誘〕・李寿康等諸君は薬剤員とし、其他〔の余員は〕凡て救護員として、別に看護婦八人を雇い、病床三十箇、病人担架運送具十六箇、殆ど完全なる一救護団の組織を完成せり。先ず部員の総人数を都合によりて、前後の二隊に分ち、前隊は陰曆十月八日午後一時頃上海より滬甯線の列車に乗りて、鎮江へ向う〔向き〕。経過せる所、南翔・蘇州・無錫・常州の如き、大市場は已に革命軍の手に帰し、閭閻故の如

く、商賈〔買〕依然たり。唯道に沼〔沿〕いて、白旗の金風に、飄蕩せらるるを見れば、胸中自ら一番の新氣象を催進せり〔飄蕩せらるるのは、一番の新氣象を増し、胸中に如何なる感慨を引き起さんとするや〕。同六時頃に鎮江に着す。同地は〔同日六時頃に鎮江に着し、其の所は〕揚子江沿岸の一大市場なれども、上海に此して誠に霄壤の差あり。当日〔本日〕前隊全員は鎮江駅の近傍〔鎮江駅近傍〕にある琴園と云う遊園地に止る。〔止まり、〕寒月朦朧として、暗蟄黄昏に泣き、軍筋と戍鼓〔と〕相互に呼応するが如く、万羽寒鴉共に暮煙叢樹の中に飛鳴し、我か団員囚らずして、之日鎮江に天涯の征客を作す。

翌日、即〔ち〕九日、朝六〔七〕時頃に、副医長韓興及び蔣志新〔団員蔣志新及副医長韓興〕二人、軍用列車に乗りて、鎮江発江寧（即南京）の前関なる堯化門に向う。〔向き、〕朝煙尚お鎖して、霜痕未乾かず。駅に至る後に、駅長呉煥全氏に遇い、我等〔我々は〕彼に一切の軍事上現状及び我団の進行する方法を探問して、民軍日々勝利の捷報を得、且つ〔得と。〕南京の外城已に民軍の手に占領せられたりと。〔せらりたりと知りて、〕現勢によれば、我団は至急〔我団が〕堯化門に移る必要あり。於是蔣志新より、民軍々医徐樑に手紙を出して、相当なる民房を貸すことを依頼し置き、直に鎮江に引き返せり〔依頼したりて、鎮江に引き返えりたり〕。

十日朝より晩迄〔十日朝より〕、民軍々医徐樑の返事を待つ〔待ちて〕。午後六時頃に至り、始めて〔六時頃始めて〕「所あった早速堯化門に來れ〔來し〕」なる電報に接す〔電報を送りて來たり〕。団員中には同晩直に〔団員中同晩即刻〕前進の必要を主張する者多けれども〔する多けれども〕、当日の列車は最早運転せず。故に止むを得ずして、次日に俟たざるをべからず〔本日の列車も無し。又準備上も間に合わぬと止むを得ずして、次日に俟たざるべからず〕。

十一日、駐鎮前隊は、民軍都督府の電報を受く〔又都督府の電報を受け〕。其中曰く「南京目下戦争中にて負傷せる兵士多数に続出る為め、急速〔兵士は数多に出る為に為に、早速〕堯化門へ向って來れと」催促せり〔して來たり〕。又鎮江駅より我等の為に特別なる列車準備せらる。〔列車を準備しておると、〕於是我前隊は鎮江にある來診者は〔の〕都合上によりて、部員中より医員及看護婦数人を残して、之に当らしめ、其他〔残して、其他〕全部堯化門に到着す。方に〔堯化門に移したれば、〕夜色微茫として〔微茫して〕、東西を〔に〕弁別すること能わざる〔能わざりし〕。黑暗中にて、軍医徐樑君を尋ぬるも求め得ず〔徐樑を訪問しても逢わざりき〕。其時恰も数人〔其時に数人〕の斥候兵は我の前に現れ、我団の行方を取り調べ、并に護照を検〔検査〕する請求条件を提出して、我々に対し、多少の嫌疑を抱くものの如し〔如くあり〕。而して、我等は〔我々が〕鎮江より忽々として出発せるが故に、一切前途の手續を準備せざりしを以て、漸く〔準備せられざりしを〕弁解の結果に、彼等の嫌疑を幸に取消せしも、我等の自由行動は絶対に許可〔絶対的許〕せられざりし。蓋し其日両軍〔正に〕戦闘激烈にして〔しつつありて〕、至る所に〔所迄〕探偵潜伏し、深夜の中に誤りて、伏路の兵に銃撃せらるるやも計り難し。〔銃撃せらるるかも知るべからずして、〕徒に生命を捨るは無益なり。〔と〕止むを得ざるを以て〔得

ざるに)、荷物列車一輛を借り〔貸して)、我々前隊員〔は〕其中に於て、縦横錯雑に倒臥す。〔して、〕風霜四面より迫り来て、寒気は幾層の綿衣をも透過し、氷天雪地の中にても之に過ぎざるべし〔過ぎざる〕と推想せり。其夜寒月は薄雲に隠れ〔是夜は寒月薄雲隠して〕四野〔にて〕鶏犬の声無く、〔なかりし。〕唯天崩地震〔地振天崩〕の炮銃声は新年の爆竹の如く〔き〕連続し、寒威凜冽の間〔凜冽の瞬間〕に夜が明け〔き〕たるを知らざりき。

十二日朝に至りて、軍医科の〔民軍軍医の〕護兵〔(即) 徐樑氏の〔所の〕小使) 一人来て、都督府の命令を伝え〔奉りて)、同駅の近傍に於ける張姓茶店なる所を選定し、既に赤十字寄舎の札を張りたりとて、〔茶店なる所を得たりて、已に赤十字社寄舎の札を貼りたりと云い、〕直ちに我等を同処に案内せり。至り見るに〔同所に引き去れば〕狭小なる部屋に加うるに〔に拘らず)、牛馬の糞便〔の〕前後門に散積して、臭氣鼻を襲い、殆ど坐立の所もなく〔して)、止むを得ず、暫く休息せり。〔し、〕間もなく負傷兵士五十余人来て、治療を求む。午後民軍が南京の城内に進撃せしを以て〔押し込みて)、我等も共に城内に入らんとすれども護照無く、為に目的は達せられざりき。時光忽々として腫を旋し、〔旅する間に忽ち〕夕陽西山に没す。〔落ちて、〕屋の都合により韓興及び蔣志新の〔と〕二人残りて、他の団員は皆鎮江に引き返せり。其〔団員又鎮江に引返し。彼の〕汽車飛ぶが〔の〕如く、其数員恰も鳥羽〔鳥翼〕よりも軽くして数百里の長途を一日にして〔長途一日〕東西に往復せり。〔せられ、〕残り〔る〕の二三人は馬と隣人として一宵を伴臥したり。同(日) 医長蔣君は始め上海に残る〔の〕後隊全部を率い、鎮江に〔到〕着して之等も亦琴園に入り、同晩医長蔣君は〔同晩蔣可宗君)、直に列車に乗りて堯化門に来たり〔来たり〕。

十三日、鎮江に駐在せる団員は堯化門の支部〔一部〕を助くる為めに五人を派せり〔五人来たり〕。此日堯化門に駐在せる前隊は朝より晩〔に至る〕迄、凡て病兵八十余名を治療したり。其中重傷せる兵士一人は、午後の汽車にて、之を鎮江に於ける本部に送る。〔送り、〕是日午後医長〔午後蔣可宗君)、堯化門より南京城内に入り、都督府を訪い、〔訪いて、同晩の〕軍政府の紹介にて、城内碑亭巷洋務局を以て、我団の駐屯所となす。〔とし、〕於是医長蔣君は堯化門の前隊及び鎮江の後隊に各々電報を送りて、曰く即速全部南京城内に移るべしと。

十四日鎮江にある臨時病院の〔に居る〕患者は上海の本病院に送り、其鎮江に残れる〔残るの〕後隊は、午前十時頃出発して、堯化門に居る前隊と合併し、午後四時下関駅に着〔著〕し、万山四面に城郭の如く廻繞して、処々に山頂或は岡の上に於て、白旗の〔は〕風に随いて揺漾せり。其地勢〔揺漾し、〕流石に古来〔の〕天嶮と称したるに愧ず〔天嶮と云うは愧あらず〕。是日上海より民軍の糧食を輸送し来る為に、諸馬車等悉く之に雇われ、為めに我隊の〔悉く雇われたりして、我が〕荷物は非常に重く〔き)、且つ数多きも運搬するを得ず。〔数が多くありて〕駅より、城内碑亭巷洋務局迄は、約二十里を距つるを以て、此状態にて、進まば日は暮れて、城門も閉鎖せられん。然るに〔約二十里の距離を有して、

日も暮れて、城門も直ぐに閉鎖するに] 彷徨として路側に団集し、敢て善策なかりしを以て、遂に[なかりし、止むを得ざるに] 団員中の一部は四面八方に奔走[散布]して、車馬を捜尋せるに、漸くにして[捜尋する方法の外あらず。果して] 三輦の人力車を得て、先最も[尤も] 必要なる荷物を運搬せしめ[さして]、残りの[残りておる] 荷物を看守する為めに、五人計りを留め[残して]、全部人員は此三車の人力車を連れて[連れて] 入城したり。残留せる[残る] 五人中[五人より] 二人は荷物列車中に宿り[て]、他の[其] 三人は近所の旅人宿に泊し、[旅店の残灯豆の如く] 将に郷関の夢に入りつつあるときに、旅店の門を叩く[き] 声あり。急に起きて出でてみれば[急に起きし戸を開けると]、団員[の] 一人と民軍交渉司員何兆華君、洋務局より馬車三輦を雇い来り。又都督府の護照を携えたり(携えて来たり)。於是一切の荷物を之に積んで、城内に入る。[於是応用の夜具薬品等先馬車に積込みて、城内に送り、] 皓月空に懸りて[空々当り] 江山の色を添え、道を夾む所の[道を求む] 残柳[が] 風の為めに振触して、声あり。遠き城廓鋸の如く、軍馬隣々として、荒郊曠野の中を[に] 通行し、昔日の秦淮繁華景象何処にありや。噫滄海桑田之感を惹き起さざるを得ざるなり[起こさざれば能ざるなり]。十五日午後より今日に至る迄、平均毎日病兵八九十人を治療したるなり。

陰曆十月二十九日

留日長崎医学専門学校 中国赤十字団書記員 蔣志新報告

長崎医学専門学校研瑤会諸先生殿

[留日長崎医学専門学校 中国赤十字団書記 蔣志新報告

陰曆十月二十九日

東洋日の出記者殿]

③長崎医専留学生赤十字隊の記録 その2 (1912年1月15日から3月15日まで)

次に、長崎医学専門学校『研瑤会雑誌』第106号(1912年5月31日発行)、100~106頁に掲載された「留日長崎医学専門学校中国赤十字団報告書」(原文中国語)を、坂本の翻訳により、紹介していく(写真1参照)。なお文中の[]は筆者が補足した箇所である。

留日長崎医専学校中国赤十字団報告書

元月十五日

天気は曇天で寒冷。各処で臨時総統の命令を奉って、新年を祝すために休日としているので、本病院もまたこの日を休日とした。特別に小宴を設けてお互いに酒をすすめあった。この日の正午で清との和議期限が満期に達する。まさに和議の決裂か、それとも再延期して妥協をはかるのか、それは我らの予想が及ぶところではない。本団員、三名、五名と連れだって町をゆけば、五色旗が目にも眩しく、あちこちの兵営からは楽器や礼砲の音、商

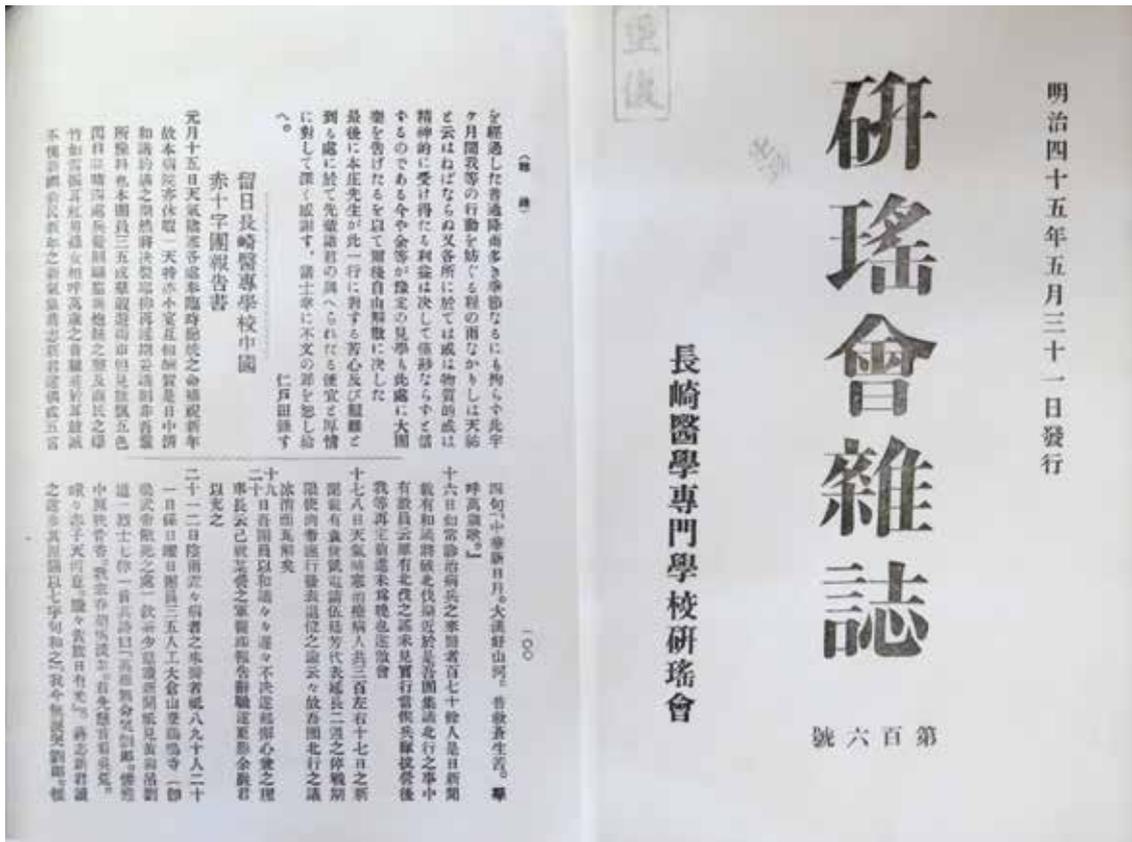


写真1 『研瑤會雜誌』(第106号) p 100より
(千葉大学附属図書館亥鼻分館所蔵)

店街からは爆竹の音がして、雷鳴のように耳に響き、着飾った男女が「万歳」と叫びあう音も混じって耳を震わす。誠に流石は新国新民新年の新氣象である。蒋志新君はさっそくその様子を五言四句の詩に詠んで、「中華新日月、大漢好山河、普救蒼生苦、群呼万歳歌」。元月十六日

いつものように、来院した病兵の百七十余名を診察治療した。今日の新聞に、和議はまさに破談し北伐の 때가近いとあり、この日、我が団の北進について皆で議論した。北伐の噂が有るといっても、いまだ実行に移されていない、実際に兵隊が移動を開始するのを待って、その後に我らが前進を決定したとしても遅くはないと言うものが何人かいて、すぐに散会となった。

元月十七日、十八日

天気は晴天で寒冷。病人の治療は合計約三百人。十七日の新聞に、袁世凱が伍廷芳代表〔南北和議の南方代表〕に二週間停戦期限を延長し、清帝退位の論をすぐにもでも発表いただくとの電信連絡云々とあって、我が団が北進について話しあってきたことが泡と消えて瓦解した。

元月十九日、二十日

我が団員、和議の話し合いが遅々として決議なく、ついに団に懈弛の気が起こる。そして、理事長は既に某營の軍医から辞職の申し出があり、余巖〔大阪高等医学校の留学生〕君を代わりにあてることにしたと言っていた。

元月二十一日、二十二日

じめじめとしきりに雨が降る。来院した病人は八、九十人ほど。二十一日の日曜日、三人、五人と連れだって大倉山に登り、梁の武帝が餓死した所として知られる鶏鳴寺にて飲茶し、小休止をとった。新聞を読み、黄興が劉道一烈士の弔いに詠んだ七律一首が目に入った。その詩に曰く、「英雄無命哭劉郎、慘憺中原狹骨香、我未吞胡恢漢業、君先懸首看吳荒、啾啾赤子天何意、臘々黃旗日有光」。蔣志新君、この詩に韻を踏みそれに続けて七律句を詠んで、「我今無淚哭劉郎、惟熱爐中瓣香、吾漢刻今恢大業、恨君墓畔已荒々、問公泉下能知否、五色旗暉映日光、他日鉄匱修國士、芳名標布遍蒼茫」。

元月二十三日、二十四日

天気は寒冷で雨雪が降り続く。来診に来る者は非常にまばらで百名にも満たなかった。午後、あまりに無聊をかこって、蔣志新君と韓興君は雪をもものともせず、南洋第一樓に飲茶に出かける。韓興君、思わず五言律詩を詠んで、「無量自由血、釀得復神州、平和扶国力、一視解民憂、風雲驅四海、竹帛耀千秋、願救蒼生苦、更何有所求」。蔣志新君もまた七言絶四句を詠んで、「我在南洋第一樓、故都新象入凝眸、始知有箇英雄血、好換金甌耀五洲」。その後、すぐに病院に帰った。

元月二十五日、二十六日

雪はやみ、寒冷。大多数の兵隊は移動して北に向かった。それがために、来院者が非常に少ないので、我が団の団員はあまりにもやることなく、ある者は休暇をとって故郷に帰り、ある者は軍に入隊した、我が団、日々に衰弱を呈している。

元月二十七日

天気は晴れて暖かい。午前十時ごろ、陸軍部の派遣員張氏、本院を訪れ我が団の組織と経費と活動実績を調査し、十二時になって帰られた。その晩七時ごろ、一人、陸軍部の公式書簡を携えた人物がやってきて、それをあけて見るに、「(上略) 留日長崎大阪医学校学生が組織した赤十字団を調査したところ、途切れることなく戦場に付き従い、艱難辛苦を甘んじて、病院を設けて非常に多くの軍人を治療した。今、この学生が組織している病院は上海赤十字社に付属し、經常経費はほとんど当該赤十字社が自ら工面し、様々な場所で救済活動をしている。陸軍部は軍病院を設立し、軍関係者の治療に専任している。当該団は熱心に慈善し、かつ光復後は著しい功績を重ねており、当然に補助し唱導奨励すべきであるから、ここに銀五百円を進呈、願わくば誉れとして納められたい(下略)」とあり、書簡の中に銀票で五百円が付されてあった。我が団員、この書簡をありがたく受け取り、書簡を掲げて歓喜して、屋外にも響くような猛烈な万歳の声を挙げた。その後、すぐに感謝状をしたため、翌日送付した。

元月二十八日

大変に良い天気で暖かい。この日曜日、韓興君と蔣志新君が車で蘇州にまで出かけ駅についた後、地元の舟を雇って寒山寺を訪ね、古い石碑をいくつか視たところ、すべて新たに修理がされていて、完全に往時のたたずまいを残すものは見るができなかった。蔣志新君は四句詩を詠んで、「売薬偷来半日間、呼朋買棹訪寒山、鐘声不到遊人耳、但聽珊瑚寺外吹」。夜になって車に乗って病院に戻った。

元月二十九日

朝に雪がふり、暮れには晴れ。この日は北伐の準備のために休診。

元月三十日

天気は晴れて寒冷。午前十時、皆で集まり会議して、公挙して蔣志新君を代表とし、本団の上海総社に薬品・機材等の買い足し要求に派遣する。

元月三十一日

天気は晴れて寒冷。午前十一時頃、教育部の秘書官で鐘某氏という人物の具合が少し悪いとのことで、韓興君の往診を依頼するために遣わされた人があった。二時余りになってやっと帰っていった。この日の新聞に女性烈士の秋瑾が、女性の権利をテーマにして詠んだ詩が二首あって、誠に女性活動家の先覚であった、今、特にそれを記録しておこう。「我輩愛自由、勉勵自由一杯酒、男女平權天賦就、豈甘居午後、願奮然自拔一洗從羞恥垢、若安作同儔、恢復女權勞素手」。また一首に曰く、「旧習最堪羞、女子竟同牛馬偶、曙光新教文明候、独立占頭籌、願奴隸根除智識學問歷練就、責任上肩頭、国民女傑期無負」。

二月一日、二日

天気は晴れて寒冷。蔣志新君が上海から戻った報告会の席上で、我が団は現在、薬品・機器及び日々の運営費として合わせて約一千円を必要としているが、その経費はあてが無い。したがって、今後活動の継続は不可能であると言わざるをえない。ただ、上海とは別に豫晋秦隴〔河南・山西・陝西・甘肅合同〕の紅十字会があって、今もなお救護団員が不足していて、我が団と一緒に汴〔河南省開封市の別称〕晋〔山西〕等の省に出発したいとのことであった。彼らは薬品・機材と日用経費についてはまだまだ余裕があるとのことで、我が団としては断る理由が無いと思うが、この話の公決を願いたいと話した。皆の決議は決せずにはいたが、豫晋秦隴紅十字会からの誘いの電報が、さっそくその夜、団に届いた。この夜九時頃、団員の汪尊美、汪尊桐〔ともに大阪高等医学校留学生〕の親御さんの訃報がとどいて、みな嘆息して已まず。

二月三日、四日

天気は晴れ。午前十時頃、上海から来た電文に奮い立つ。電文に曰く「南京碑亭巷赤十字社蔣宛て、今すぐ全隊速やかに上海に来たれ、荷物をまとめて必ず出立されたし、豫晋、璜千同より」。ここにおいて、再び代表の蔣志新、何積煥〔大阪高等医学校留学生か〕の二人を交渉させるために上海に派遣した。

二月五日

未明に、団員の蕭翊唐君が流行の感冒を患い、高熱を発し、煩悶して急に団員を呼び寄せ

たところで、「諸君、お別れだ、出発したまえ」と言う。時に、銀色の霜は地に満ち、満月が天空にあって、病床で励ましの言葉をかけて慰めたが、どうしようもない。我が団全体で上海に赴き、河南、陝西方面に出発するために、蕭翊唐君を陸軍医院に送り、この日、大半の団員は車で上海に向かった。

二月六日

天気は晴れて寒冷。我が団員、今、全員が上海に到着し、豫晋秦隴紅十字会の出発を待っている。

二月七日

天気は晴れて寒冷。我が団員すでに上海総社に全員集合、豫晋秦隴紅十字会と打ち合わせ。終了後、一緒に河南、山西方面へ出発。

二月十二日

天気は晴れて温暖。この日、団員の汪尊美、汪尊桐の父親の葬儀が行われたので、午前九時、我が団員から代表者八名に輓聯輓章を持たせて、汪宅へ向かわせた。こころよく迎えられ、霊前に三鞠躬し、汪尊美、汪尊桐他の方々へ慰言を告げ、しばらくして帰った。この晩七時半、豫晋秦隴紅十字会の諸君と大通行きの船に乗り、湖北へ出発。この夜十二時ごろ、初めて汽笛一声あって、黄歇の岸より船出する。

二月十三日

雨が降る。揚子江を一望すれば浩々蕩々として、海との境界がつきかね、まさに望洋の嘆の感慨。韓興君が一首詠んで、「長江一泛大通州、浩々蕩々不辨州、広済蒼生我事業、就先天下後身憂、潼関此去三千里、客地総須一月遊、回首古郷人不見満天風雨独含愁」。

二月十四日

雨が降る。午前中に南京の江口に停泊、約三十分で離岸。午後四時半、蕪湖停泊。一時頃、またもやいを解いて前進。

二月十五日

風清く陽が暖かい。船頭に立って一望すれば、そこには沿岸の村落の碁石のようにならんだ様子と、漁船の帆柱が林立する様子が広がった。午後五時に九江に到着。ある人が号外を持って来て、清朝皇帝は確実に既に退位したと語る。船の全乗客がそれを伝えあったため、どこまでも遙か遠くに届くかのような、人々の万歳の声があがった。余岩〔巖〕君七律の詩を二首詠んで、「二陵白骨未全收、奔逐刀圭事遠遊、兩岸雲山嘯過客、一江風雨鬧行舟、已伝得鹿仍疑夢、欲遂飛鴻無限愁、来日大難須努力、凭誰完補碎金甌」。「瘡痍满地豈為家、西望嶠函去路殊、術淺不堪医国病、憂深猶自碎春華、妬功越国多烏啄、喰血秦関有虎牙、和局雖成兵未息、莫辞添足到金蛇」。

二月十六日

早起して一望したところ、一面に濃霧がたちこめて、航行することができず、午前九時になって初めて船が進む、午後六時になり、漢口に到着。しばらくは鳳台賓館に宿を取る。

二月十七日

この朝、車に乗って河南に向かう。清朝皇帝が退位したものの、南北の二軍は未だ統一されなかったわけではない。車で開封へ直行はできないとのことで、遂にまた逗留となった。八時、我が団員、二人三人と連れ立って、かつては栄えて美しかったという街を散策。今はことごとく灰燼に帰す様を見た。その惨憺たる状況に、誰しものが痛ましく感じると思われた。十一時頃、韓興、江衡、蔣志新の三人は小さな蒸気船に乗って武昌へ向かった。一時半には漢陽の門に入り、黄鶴楼に入ろうとしたが、警備兵に止められて果たせなかった。楼閣が空に向かって屹立する様子が、仰ぎ見られるようになることを願った。二時頃、蛇山に登り、武昌の全景と川を隔てた漢口、漢陽の名所を俯瞰する。心が和らぎ、爽快な気持ちを覚えた。三時半、古の晴川閣に登ると、閣門に「禹稷行宮」と書された扁額が掛かっていた。入内すると僧が二人いて、話しをすると楼上に案内してくれて、屋根と建物を上下に貫いた大きな穴があるのが見えた。その訳を僧に尋ねたところ、まさに戦の折に流れ弾が飛んできた痕跡だと言う。窓越しに遠く鸚鵡州があり、南を見れば亀山との別称がある大別山を望む。飲茶して休息し、四時ごろ渡し舟を雇い宿に戻る。この日は旧暦の大晦日にあたり、蔣志新君は感ずるところがあつて一首詠んで、「天涯漂白歴艱辛、爆竹声呼又一春、遥想故郷今夜裏、擁爐猶憶未婦人」。

二月十八日、十九日

天気は晴れて温暖。本日は旧暦の新年にあたり、我が団員、四人、五人と連れ立って暇をつぶしに出た。以前、湖北と上海は並んで栄えていたというが、現在はひっそりとしてしまつて、新興の気配も全く無く、市場を隅まで歩いてやっと一軒の茶楼があった。入店して少し休んでから、すぐに宿に帰った。この晩、八時頃、清朝皇帝すでに退位し、まさに南北統一しようというところ、そこで会議をもって、我が団を解散するか進行するかを討論した。多数は陝西省で満州人の昇允がいまだ抵抗していることを理由に進行を唱える。それが議決され会議を終わり、その後、みな就寝。

二月二十日、二十一日

日は陰り雨が続く。新聞には、南北間、間もなく道路がことごとく回復して、車で行き来が可能などの記事。この日、怡園の舞台の初日で、夕食の後、団員四人、五人と連れ立ってそこへ行って観劇。十二時になって宿に帰る。

二月二十二日

天気は晴れて温暖。韓興、何積煥、盛在珩、蕭蔚霞等が渡し舟を雇い、漢陽に行く。朝宗門より北邱山に登ったところの山下で子供達の百人ばかりが左右の二隊に別れ、各々石礫の投げあいをしていた。二、三人の子は既に頭から流血している



図2 武漢三鎮

のに、戦は激しくなるばかり。盛君等がやめさせようとするも言うことを聞く子が一人もいなかった。後に伝え聞いたところによると、子供達の親が出てきて、子供をなだめて事を取めにかかって初めて静まったとか。盛君等、後に大別山に登る。山に臨む大江、月湖の西側を川の流れは東に向かい、関山は北に、鶴楼は南にあって、韓興君は登山の感慨を詠んで一首、「鳳台斜日扨証袍、此地登臨意気豪、北望関山千里遠、東遊漢水一帆高、汴中怪傑争牛耳、塞上蠻兵擁虎韜、鉄血既終簧舌統、平洋何日鎮狂涛」。

二月二十三日

この日の朝、午前七時、昨晚友人を訪ね、未だに戻らない江衡君を待っている間に、時間切れとなり、出発出来なかった。

二月二十四日

午前七時頃に起床し、八時には大智門についた。八時四十分、車に乗り夜の七時に武勝関に到着。ここから先は河南省。この日は、丸一日米を食べることができず、わずかにパンの一切れ二切れを食べたきりだった。八時四十分、信陽州に到着して、やっと饅頭一杯を食べた。この夜は腕を枕に雑魚寝で、一晚寝付けなかった。

二月二十五日

午前七時二十分、許州に到着、十二時、鄭州につき、卵パンだけで腹を満たした。ここより汴洛路車に乗り換え、午後五時二十分になって洛陽に到着。すぐに旅館に投宿。部屋の壁に二首の詩があって、今、特にこれを記録しておく。「雨棧雷車夢亦孤、雲鬢半脫任風梳、長途誰識阿儂苦、為聽山中叫鷓鴣」。その二として、「十載江湖嘆影孤、風霜兩鬢愧難梳、繁華一覺燕京夢、辜負枕邊聞鷓鴣」。詩の下に「庚戌孟冬 [一九一〇年の十月] 蜀西女子」の署名あり。

二月二十六日

冷たい雨やまず。何積煥君が寒熱を患ったので、一日逗留した。

二月二十七日

午前九時、騾馬引きの車（毎年騾馬二匹をこの車引きに充てるという）で洛陽の西門から出発、午後二時、谷水鎮に到着し、昼飯として饅頭を食べる。五時半、磁澗について旅館に投宿。蓮の葉大の麵餅と肴と酒を頭がくらむまでいただく。非常に美味しかった。北方は概ね麵を常食にしている。

二月二十八日

早朝六時半に出発。清らかな風が吹き、鳥は舞い、カササギがさえずる。すこぶる精神爽快。八時半、とある村にてパンを食べ、腹を満たす。我が団員のほとんどが、でこぼこ道の為に車で進めず、歩行して移動。車に乗ればいつものように行かず、目はくらみ頭が痛み、特に酷かったのは蔣志新君で、引き車に乗って数里もしない間に、頻繁に嘔吐した。それで、彼は朝から晩まで歩いて通したが、却ってその方が楽そうであった。午後五時半に関門鎮に到着。ここは二ヶ月前に戦闘があったので、旅館はどこも閉館し、余所へ行ってしまった。ついに行宮に投宿。即ち庚子 [一九〇〇年] 清朝皇帝が西安へ逃れた時に泊

まった場所だという。

二月二十九日

早朝六時半に出発。山道を登り一望すると、寒さに霜が地に満ちて、冷気は我々に迫る。しばらくして、温かい太陽が空に昇り、カササギのさえずりも聞こえてきた。この日、道中、北軍の兵士達が銃を負い、刀剣を携え、凱歌を歌いながら南来してくるのを目撃した。午後五時半、繩池に宿をとる。

三月一日

早朝の五時に出発。すぐに丘陵を登ろうとしたが、引き車がたちまちのうちに転覆。幸いにも車夫六、七人が一致協力して、起こしあげる。空はすっかり明るく、遠くの村の鶏の鳴き声による、夜明けの知らせが次から次へと聞こえてくる。この日は、道路状況が非常に悪く、驟馬にいくら猛烈に鞭を打っても前進せず、晩の六時に観音鎮に到着して、すぐに投宿した。

三月二日

曇り空、風が強い。朝六時半出発、約五里ばかり行ったところで、一台の引き車が転覆。幸いに破損がなく、すぐに起こすこともできた。この日の山道は險阻で雲霧が一面にたちこめて、一丈四方の他は、人の顔の判別もつかぬ程であった。途中、数百人の兵士と遭遇した。彼らは、潼関よりの帰りと言う。潼関の戦闘の有無を尋ねると、彼らは皆すでに平静と言う、また、昇允の動向について聞くと、すでに帰順したという。この晩六時、張茅鎮についた時には、雪の勢いが激しく白銀世界となっており、投宿することにした。

三月三日

曇天、早朝六時に出発。道中、また数百人の兵士と遭遇する。我が団員が「どこより来て、今、どこに向かうのか」と尋ねる。彼らは「潼関より来て、まさに河南へ帰る」と言い、さらに、我が団がどこに向かうのかを問い返してきた。今から潼関へ向かうと応え、彼らは、「すでに潼関も事収まり、それで我らは軍を返している、君等は今から行って何をするつもりなのか」と言い、言い終わると拳礼をもって別れて行った。午後四時、陝州城に到着し、すぐに旧陝州中学校に投宿した。この晩、我が団、進むか或いは解散するかの問題について集まって会議を開いた。進行、解散それぞれの理由について議論百出して、遂に決しないまま就寝。

三月四日

なおも小雪が舞う。この日は、逗留とし進まなかった。十時頃に多数を占めた意見は、「清朝皇帝が既に退位し、南北もまたすでに統一し、ましてや潼関と西省の各処は皆平静無事となるに及んで、全ての軍隊もみな既に部隊移動している。今、行って何をするのか」というもので、ついに上海へ帰ると決議。この晩、酒を買って愁を晴らす。蔣志新君が七絶四句詠んで、「刀戟叢中鵲報来、一篠血路為誰開、始知天下殺無辜、敬祝共和拳酒杯」。

三月五日

曇り空で温かい日、九時頃上海を目指して出発。十里ばかり行った所で、一両の引き車が

転覆。幸いにも通りかかる旅人が三、四人あって一緒に助け起こす。この晩、磁鐘鎮において投宿。

三月六日

曇り空で温かい日。風が非常に強い。六時に起床、卵一個を食べる。一里ばかり行った所に村があり、パンを購入して食べた。少し行くと英豪鎮に着き、昼食。夜八時に廟姑鎮にて投宿した。韓興君、一首の詩を詠んで、「鞭馬回車日欲遅、陝城雲樹遠含悲、西路烽煙今已息、関東人士世無知、疾厄相憐維有友、邦家興復在今時、名山勝景問何在、從此徒袍無所施」。

三月七日

晴れ空で温暖。六時頃、身支度し、パンを食し腹を満たし、七時に出発。九時十五分淹池に到着し、小休止をとる。この時、兵士数百人と陝西軍政府の旗を掲げた軍用車十余両があって、中の二、三両は五色旗を掛け、兵士は帽子に星をかたどった徽章をつけているのを目にした。やはり南北統一の証を、今日、目撃することになった。夜八時頃、石門鎮に到着し投宿。

三月八日

早朝三時、身を起こし、顔を洗い口をゆすいで出発。空にはただ星が横たわり、北斗七星と半月が浮かぶのが見えるのみで、鶏や犬の声もない。鳥のさえずりすらなく、静かであったが、瞬く間に、大空に陽が昇り、山の峰々に霧がたった。新安県に着いて食事をとって、この晩六時頃、洛陽に投宿。

三月九日

大変良い天気。五時に起床、六時に出発。すぐに駅に着き、駅長と交渉し、我が団の運賃免除が認められた。七時十五分発車。十二時鄭州に到着し、京漢路車に乗り換え、晩の六時に馬店に停車。車中泊。

三月十日

風穏やかに日うらら。晩の六時に漢口到着。江衡君は漢口の手前、三家舗で我らと別れて下車（実家が近い）。江衡君との別れに際して、韓興君が一首詠んで贈る。「驟車来自洛城東、幽谷崑凌在眼中、大地蒼生將濟日、一天宿雨太和風、暁星催駕千山黑、夕照当旗十字紅、西路此回多險厄、畢生苦樂與君同」。蕭蔚霞君の家は漢口に近いのでここで下車。この後、さらに実家に行くために別れた者を除いて、皆、小さな蒸気船に乗り換えて、南京を目指した。

三月十一日

曇り空だが、風は温かく波が高い。九時に九江に到着。非常に貨物の揚げ降ろしが多く、午後一時になってやっともやいを解いて出航。ただ三、四里行ったところで、激しい風雨と山のような波のために停輪して進まなかった。夜は大雪になり、そのために両岸は白一色となった。

三月十二日

雨雪が降りしきり、寒風吹きすさぶ。午後三時に安慶に到着し、二十分程停輪してすぐに出航。兩岸一面白雪にすっかり覆われた様子を見る、白銀世界とはまさにこのこと。この晩七時に大通に着き、十分停輪しすぐに出航。

三月十三日

午後南京に到着し小休止。この夜十二時、車に乗って上海へ出発。

三月十四日

早朝七時、上海に到着。すぐに赤十字総社に向かう。寝たい者は寝て、出かけて友人と会いたい者は出かけるといった具合に、各々みな自由行動。蔣志新君は一首詠んで、「不畏風塵苦、生涯伴馬騾、数年心事尽、万里足踵多、漢時瞻雲氣、秋風發浩歌、吾儕今卸責、前道樂如何」。

三月十五日

午前十時、赤十字職員と我らで大きなレストランで散会式。まず理事長から活動報告の後、赤十字職員より演説と賛辞をいただく。その後、各々杯を挙げ、互いを祝して大いに飲む。午後三時になって解散。これにより、我が留日長崎医専学校中国赤十字団、雲飛して星散。

陽曆四月十九日

留日長崎医専学校中国赤十字団書記蔣志新報告

田代正校長殿暨

諸教官先生 並

同窓諸君鑒

④長崎医専中国留学生赤十字隊のみた「辛亥革命」

A 資料概略

ここで紹介した留日長崎医専学校中国赤十字団報告書は、その名の通り、清末に長崎医学専門学校に留学していた中国人学生達が、辛亥革命に際して中国へ帰国し赤十字（中国では「Red Crose」のことを「紅十字」と翻訳し用いている）活動を行った記録である。

上海に到着した1911年11月28日から、南京入城に到る同年12月29日までの記録は、長崎医専が発刊した『研瑤会雑誌』第104号（1912年1月）に日本語で掲載されている。また、1912年1月15日から上海で解散する3月15日までの記録は、『研瑤会雑誌』第106号（1912年5月）に中国語で掲載されており、今回坂本が翻訳した（写真2参照）。

長崎医専の赤十字団（以下「団」と略記する）が南京に滞在していた1912年1月1日に、中華民国臨時政府が成立しており、南京の攻城戦を間近で体験していた彼らが、どのような感慨をもったのか、そして、南京の市井の人々の様子が彼らの目にどう映ったのか、非常に興味のあるところではあるが、惜しいことに『研瑤会雑誌』第105号（1912年3月31日発行）には、元日をまたぐ1911年12月30日から翌年1月14日の活動記録は掲載されていない。彼らの活動記録が、なぜこのような変則的な形で掲載されることになったのかは、



写真2 鉄血十八星旗と五色旗（辛亥革命武昌起義紀念館内会議庁）

不明である。

さて、これまで辛亥革命に携わった人々の記録の多くは、後の国民党、共産党といった革命政党による一党支配下で運動の記録が整理される過程で、いかにその活動が革命的であったかが強調された資料が多く残される傾向があるように思われる。しかし、本資料は、日本で発刊され、主に日本人学生や学校関係者を対象とした雑誌、あるいは『東洋日の出新聞』の読者向けに掲載されたものであるという経緯から、そのような傾向に流されることがなく、中国人留学生たちの行動の“生”の姿を伝える貴重な資料であると思われる。

1911年10月10日の武昌起義の成功に端を発して、他省へ伝播した清朝への反乱は、清朝側の反攻で11月2日に漢口、同月27日に漢陽（武昌は、長江・漢水で隔たった漢口、漢陽と合わせた三地域で武漢を形成、武漢三鎮と呼ばれる。図1参照。）が再び清朝側の手に落ちると、戦いの中心地を武漢から南京に移した。その南京では11月23日から激しい戦闘が始まり、12月2日に革命軍が南京を陥落させ入城した。以降、12月18日から上海で本格的に南北の和議会談が開始され、その過程において、1912年1月1日、中華民国臨時政府が成立、アメリカからヨーロッパを経由して帰国した孫文が臨時大總統に選出される。

留日長崎医専中国赤十字団は、上海に到着後、大阪高等医学校の一団等と合流の後、南京攻城戦の進展にあわせ革命軍の要請に応じて、南京の西方約60キロにある鎮江、南京の城外地堯化門、そして、城内碑亭巷へと移動しながら傷病兵の治療にあたっていく（『研瑤会雑誌』第104号相当部分）。その後、2月6日、赤十字総社のある上海に戻り、さらに別の広域赤十字団と合併し、長江を遡り、南京を経由、途上で清朝皇帝退位の情報に接し、2月16日武漢に到着。同月24日、陸路で河南省を進み、まだ満人の陝西巡撫昇允が抵抗中との噂があった陝西と河南の省境の町、潼関を目指す。道中ですれ違った革命軍兵士から、

昇允が既に帰順していることを知らされ、3月3日、河南省西部の陝州に入った所で、上海に帰還することを決定し、3月15日、上海で解散したというのが、本資料に見える概略である（『研瑤会雑誌』第106号、今回、翻訳相当部分）。その行程については図2参照のこと。

B 救護慈善と従軍

彼らが帰国し、赤十字活動を行うに至るまでの経緯は、小島淑男『留日学生の辛亥革命』（青木書店、1989年）に詳しい。中国人留学生による赤十字活動は、準備段階から千葉医専の学生達によるリーダーシップの下に準備が進められ、11月2日に決定した留日医薬学会聯合会の七条から成る大綱には、「第二条 本会は博愛を以って宗旨とし、官軍と革命軍とを選ばず救護治療す」「第六条 本会は官革両軍にたいして毫も偏袒せず」とあり、また、11月18日に組織された中国紅十字隊の役員には、正顧問、副顧問ともに日本人が就任している⁽²⁸⁾。千葉医専のメンバーも、革命軍に強いシンパシーを抱いていたことは間違いないと思われる⁽²⁹⁾が、本稿第1章④「日本の赤十字社と清国赤十字社の動き」にもあるように、建前としてではなく、日本人を関与させることで、救護慈善の思想を担保してもいたのである。

彼らは赤十字活動の意義を強調することで、学校からの了承ばかりでなく、あらかじめ清国公使を通じて、活動に関する清国からの許可、そして援助まで得ている⁽³⁰⁾が、本資料にあるように、清政府軍の陣中から前線に接近しているわけではない。

赤十字の医療活動だけが目的であれば、北京の指示を仰いで前線を目指す行路も取りえたと思われるので、彼らの実際の目的は、医療活動を通じた革命軍側への従軍と見てよいと思われる。にもかかわらず、先に説明した通り、南京の攻城戦は彼らが帰国した直後とも言える12月2日に決着し、12月18日からは、南北の和議交渉が始まり、以降、解散する3月15日まで、彼らは“従軍”することが無かった。

そこで、興味深いのが、1月17日、18日の「団に懈弛の気が起こる」という記録と、1月25日、26日の「ある者は休暇をとって故郷に帰り、ある者は軍に入隊した、我が団、日々に衰弱を呈している」という記録である。

従軍活動が行われている間は、救護慈善の思想と従軍志向の両立が保たれていたと思われる。しかし、従軍活動が停滞することによって、しだいに赤十字活動に飽き足らないメンバーが現れて来るようになったのではないだろうか。つまり、ここで記されている懈弛の気は、士気の低さがもたらしたものではなく、むしろ、士気の高い者にこそ見られたものではなかったか。だからこそ、ある者は軍に入隊したのであろうし、故郷に帰るといふ記述も、単純な里帰りではなく、その先に、故郷の革命軍への参加が予想されるのではないか。

残された者で継続された赤十字活動が、前半のいわば従軍期と比べ、どのような変化を見せたのかが、本資料の一つの読みどころだと思われる。

C 国旗の広まり

本資料では、清末から民国初期の興味深い状況がいくつも示されているが、その一つが「五色旗」の中華民国国旗としての定着状況である。ちなみに、臨時政府は、成立早々に陽暦の採用を布告し、本報告も、臨時政府成立以前の『研瑤会雑誌』第104号掲載分では陰暦日付を使用していたものが、第106号掲載分では陽暦日付が採用されている。

小野寺史郎『国旗・国家・国慶』（東京大学出版会、2001年）によれば、各地で蜂起した革命軍は、腕に巻いた白い布を目印にし、また白旗を革命軍の旗として使用していたが、それらは国旗としては認識されていなかった⁽³¹⁾。また、中華民国の旗として、武昌起義では鉄血十八星旗（写真2参照）、江蘇・浙江地域では五色旗が使用され、孫文は青天白日滿地紅旗を主張したが、実際には臨時政府や、統一後の北京政府が五色旗を国旗に決定布告する1912年6月8日以前に、五色旗が中華民国国旗として広まっていた⁽³²⁾。

本資料でも、団が上海から鎮江に向けて乗り込んだ列車から見える景色や、鎮江から南京に移動する道中の民軍が掲げた白旗の描写はその事実を証明している。さらに、臨時政府の成立後には、南京市民が五色旗を飾って新年を祝う様子や、撤収する陝西軍が五色旗を掲げている様子が描写されており、新国家の揺籃期において、短期間に国家の表象として五色旗が受け入れられた様子もうかがえる。

D 陝西の状況

団が活動の最後の目的地とした陝西省は、武昌起義の直後、革命党員と会党（秘密結社）が次々に蜂起し、1911年11月23日に省都の西安が光復（異民族支配からの脱却）を宣言したのを皮切りに、他の町でも党員と会党による蜂起、光復宣言が相次いだ。しかし、袁世凱の支持を受けた河南省の清軍が陝西省へ進攻すると、潼関を舞台に戦闘が行われ、甘肅省に逃れた前陝甘総督の昇允が陝西巡撫に任命され甘肅の軍をともなって11月28日に東部から陝西省に進攻した⁽³³⁾。

郭孝成『陝西光復記』⁽³⁴⁾によると、党員の蜂起が始まると、「土匪」がその混乱に乗じて方々で略奪行為を働き、清朝側が朝廷に援軍を求める連絡を阻止する為に、党員が故意に切断した電信線を補修しようとしたところ、既に遠近の電信線が「土匪」に破壊され、修理材料もなく、光復の後も長らく省の内外への電信連絡が不通であった。本資料でも、彼らが潼関の戦闘が終結したことを知らずに、河南省を経由して潼関に向かっている記述から、2月に入ってもまだ電信が回復していない様子がうかがえる。

E 「辛亥革命」と光復、共和

武昌起義以降、現在我々が「辛亥革命」という言葉で理解している変動を当時の人々がどう捉えていたのかという点である。

中華民国臨時政府成立時の記述が欠けているものの、団の報告書の中に「革命」という言葉が現れるのは、『研瑤会雑誌』第104号に掲載された報告書の冒頭、「(上海から鎮江に向かう間の大市場は) 已に革命軍の手に帰し」という陰暦十月八日（陽暦十一月二十八日）の一文の中に見られるのみである。台湾国立政治大学歴史学系教授の唐啓華は、当該時期

の歴史解釈が長らく革命派によるものに独占されてきたために、「(武昌起義から清朝皇帝退位に到る変動を指し示す言葉として) 現在の人々は「辛亥革命」しか連想できない」という問題提起をしている⁽³⁵⁾。

元月27日、団を訪ねてきた臨時政府陸軍部の派遣員は、「当該団(=長崎医専の赤十字団)は熱心に慈善し、かつ光復後は著しい功績を重ねており」と述べており、臨時政府側の人物も、この変動を「革命」ではなく「光復」と指し示していたことが読み取れる。

もちろん、「革命」の結果「光復」が成されるという視点に立てば、革命と光復は矛盾なく両立可能な概念であるとも言えよう。しかし、折々に記録されている団員が詠んだ詩の中に、「革命」の文字は現れない一方で、元月15日の蔣志新が詠んだ「中華新日月、大漢好山河」、また元月21、22日、黄興がかつて詠んだ「我未吞胡恢漢業」に比べて、やはり蔣志新が詠んだ詩に、「吾漢刻今恢大業」とあるように、満州族と対立する「漢」という民族概念が二度に渡って詠み込まれ、異民族支配からの脱却への強い思いが感じられる。

2月18、19日、既に清朝皇帝の退位を知った彼らが、なお進行を続けた理由は、「西省満人昇允尚在抗拒(陕西省で満人の昇允がいまだ抵抗している)」とあるが、わざわざ満人と記述してある点からは、満人の抵抗を制圧する戦いに従軍する意図がうかがえるのではないだろうか。

2月15日には、武漢を目指す船上で清朝皇帝の退位(2月12日決定)を知った乗客の人々が万歳をする様子が記録されている。清朝皇帝退位の翌日、2月13日には孫文が臨時大総統を辞職し、2月15日には袁世凱が臨時大総統職を継いだ。仮に、留学生達の認識において、孫文のカリスマ性や、革命派独自の政治性に付き従って、「革命軍」への従軍を続けてきたのであれば、たとえ皇帝の退位に万歳の声を挙げていたとしても、孫文の失職について何かしらの感慨が記録されているのが自然であろう。しかし、2月15日以降の記録には、孫文の失職ばかりではなく、革命軍と対峙してきた官軍の領袖である袁世凱が、臨時大総統職に就任したことについても何も語られていない。この点からも、満州族から漢民族(袁世凱は漢族である)へという光復志向の強さを読み取ることができるのではないだろうか。

後に中国国民党は、北伐の進行に伴って、国慶節等の「国家記念日」を、自身が定めた28もの「革命記念日」に改変し、その記念行事を機会に、次のような宣伝を繰り返した。

「総理(孫文のこと)二十余年の不断の奮闘は、国内外の民衆の民族意識を喚起し、革命への参加を呼び込んだ。したがって、武昌起義は、総理二十余年の奮闘の結果である」。「辛亥革命は中国近代国民革命運動の始まりである。ただし、それらはただ開始されたということに過ぎなかった。我々の現在の運動はまさに辛亥革命の継続である」。「武昌起義の後、清朝皇帝が退位し、民国が成立した」。(1926年『民国十五年国慶節紀念日宣伝大綱』)

「一、辛亥革命精神の継続、辛亥革命の欠陥の矯正、二、忠実なる同志団が団結して立ち上がること、三、北伐の継続、四、清党の継続、五、第三次全国代表大会の早期開会」。(1927年『双十節宣伝大綱』)

筆者（坂本）の見るところ、そのような政治宣伝の結果として、武昌起義から清朝皇帝退位にいたる変動は、孫文の主導した革命「辛亥革命」によってもたらされたとする概念は広まっていったと思われる。共産党も、孫文の後継者として国民党の辛亥革命概念を受け継ぎ、それをブルジョワ民主主義革命と規定したことにより、台湾の唐教授が指摘するように、現代の人々は、清末から民初の変動を「辛亥革命」という言葉以外で連想することが出来なくなったと思われる。

また、1912年10月10日、第一回目の国慶節は、当初孫文と黄興等が立ち上げた「革命紀念会」が主導していたが、政府の内務部が主催する追祭先烈儀式と合一され、「共和紀念会」と称する団体の主導に移った⁽³⁶⁾。1910年代、日本から大量のマッチが中国向けに輸出されていたが、そのラベルには、孫文ら中華民国の元勳を顕彰するもの、共和を顕彰するものはあっても、革命を顕彰するものは見られなかった⁽³⁷⁾。

つまるところ、多くの中国人にとって、国慶節は「革命の成功」として祝うべきものであったのか、それとも、「共和の成立」として祝うべきものであったのか。3月4日、赤十字団の解散が決定した後で、長崎医専留學生の蔣志新は、「報告書」のなかで、その感慨を「敬祝共和拳酒杯」と締めくくっている。

光復と革命の関係と同様、革命を経て共和制国家が誕生するという視点に立てば、やはり革命と共和も矛盾なく両立する概念であるともいえよう。しかし、「光復」や「共和」という言葉で当時の人々が表していた状況や心情を、「革命」という言葉のみで、後世の我々が語ってしまうのは、歴史認識の誤謬であるようにも思われる。この事について詳しく言及するのは本稿の目的から外れるであろうから、ここでは問題点の指摘に留めざるを得ない。しかし、長崎医専留學生が記した「報告書」は、同時代の中国人の認識を確実に反映しているものと考えてよいのではないだろうか。もちろん、清末に日本の医学校に留学した中国人である彼らを、当時の中国人全体の代弁者と看做すことはできないが、後に「辛亥革命」と称される変動に積極的に関与した人々の認識の一端として大いに参考になるものだと思われる。

おわりに

1章では、長崎医専中国留學生が、千葉医専留學生の呼びかけに応じ、東京周辺の留學生とともに連携を取り、赤十字隊組織を決定したこと。また学校の教員のみならず、地元の有華僑からの支援協力を得た上で、大陸に赴いたことなどについて、限られた新聞史料からだけであるが、その動向を具体的に示してきた。また「革命」の動きに動揺し、あるいは興奮する留學生や長崎華僑の具体的様相（新聞各紙が捉えた「中国人」像）も併せて紹介してきた。これらから「長崎」という地域に住まう中国系の人士の動きが、かなり明らかになったと言えるだろう。

今後は、新聞以外の資料、とりわけ外交文書の関連史料なども併せ、長崎・千葉の医専

生を含む、全国医薬留学生の対応をさらに考究していくことが必要である。また（千葉医専の事例としては、拙著などにより、ある程度果たしたのだが）、長崎医専赤十字隊に関わった留学生たちの卒業後、帰国後の活動⁽³⁸⁾に関わる調査を行ない、留日学生が中国社会とどう関わっていったのかを明らかにしていくことが重要と考えている。さらに、中国赤十字と留日学生赤十字との提携の詳細については、断片的な新聞史料だけでなく、中国側の論考⁽³⁹⁾などとも照らしていくことが必要であろう。

ところで、千葉医専「赤十字隊員」として大陸に赴いたはずの留学生の一部が、革命軍の軍医に就いたという報道を、今回の史料渉猟の過程で「発見」した。

「千葉医学専門学校清国留学生一同は、曩に紅十字団を組織して、帰国し、官軍両軍の間に立ち、診療救護に従事しつつあるが、今回陸軍大総統黄興の命に依り、全然同団と関係を断ち、革命軍に投ずることとなり、黄孟祥は革命軍医部長、呉亜良は近衛軍衛戍病院医長、何煥奎は同軍医部第一衛生主任、田龍瑞は第一衛生隊長に就任し、北伐軍に加わる旨、十六日荻生校長の許に通知ありたり」云々（「紅十字団所属変更」『東京朝日』1912年2月18日付）。

今後はこのような事例を、事実関係⁽⁴⁰⁾の究明も併せ、歴史の中でどう位置づけていくのかも課題となるだろう。

また2章では、長崎医薬留学生たちが、戦乱の大陸を横断した記録を検討した結果、留学生赤十字隊の具体的行動を明らかにしたばかりでなく、その「報告」から、後世のわれわれが自明と捉えがちな「辛亥革命」という認識、また「革命」、「光復」や「共和」という概念を留日学生がどのように理解していたのかについての問題提起を行ってきた。

今後は、留日学生たちによるそれらの認識に対する検討のみならず、1章で試みた手法にならい、中国で発刊されていた新聞等における「革命」「光復」「共和」といったキーワードの使われ方を仔細に分析検討し、現在の「辛亥革命」という概念の形成過程を考察することが必要と考えている。

註

- 1 見城「辛亥革命と千葉医学専門学校留学生」『中国研究月報』769号、2012年3月号（のち、見城『留学生は近代日本で何を学んだのか』日本経済評論社、2018年、に所収）。
- 2 見城「明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向」『国際教育』2号、2009年、見城「千葉医学専門学校・千葉医科大学時代の留学生をめぐる諸史料について」『国際教育』7号、2014年（前掲、見城『留学生は近代日本で何を学んだのか』に所収）。
- 3 「留日医薬学生の出身校」『同仁医学』1930年9月。
- 4 日露戦後に急増した中国留学生を、1908年から15年間、中国側の経費負担で日本の5つの官立学校（第一高等学校、東京高等師範学校、東京工業学校、山口高等商業学校、千葉医専）で受け入れる協約が1907年に結ばれた（俗に「五校特約」という）。千葉医専は、1901年に創立された（1923年からは官立千葉医科大学）のだが、前身は1887年に創立された第一高等中等学校（のち高等学校）医学部であった。

- 5 見城「長崎医学専門学校・医科大学で学んだ留学生とその特色」『国際教養学研究』3号、2019年。
- 6 本稿で用いる長崎の4紙は原則、以下のように略記する。すなわち、『長崎新聞』は『長新』、『東洋日の出新聞』は『東洋』、『九州日の出新聞』は『九州』、『長崎日日新聞』は『日日』とする。また『東京朝日新聞』は『朝日』とする。新聞史料の引用に際し、旧漢字を新漢字に、旧仮名遣いを現代仮名遣いに直している。
- 7 この時代の新聞などは、「清国人」、「支那人」、「中国人」など呼称が一定しない。よって、本稿では、史料引用中の文言はそのまま使うが、本文中においては、原則的に「中国人」を用いることとする。
- 8 「長崎」という地域から「辛亥革命」あるいは日中関係史を再構築しようとする観点は、中国近代史研究者の川島真氏の近年の成果から示唆を受けた（川島「長崎から見た辛亥革命」『総合研究 辛亥革命』岩波書店、2012年。川島「長崎から見る近代日中関係史」『日本史研究』630号、2015年2月）。そのため、第1章は、川島氏が紹介しなかった新聞史料を多用し、当該期の新聞の「辛亥革命観」をより具体的に示しただけという側面はある。しかし、2章で紹介する新史料はきわめて興味深い「歴史的事実」を示しており、その紹介も併せると、斯界に寄与するところは少なくないと考えている。
一方、小島淑男氏『留日学生の辛亥革命』は主に東京で発行された新聞記事から、留日学生の赤十字隊の動向を明らかにしている。すなわち、千葉医専留学生のほか、大阪、仙台、金沢、岡山、長崎医専留学生の動向についても簡単に紹介している。長崎の事例は11月18日付の『東京朝日』と『国民新聞』を用い、4行程度で概要を記している。それらと全体の相関については今後の課題となる。
- 9 前掲、見城「辛亥革命と千葉医学専門学校留学生」。
- 10 「広島」には医学専門学校はなかったため、この点は誤りと思われる。
- 11 これは、千葉医専留学生37名が、全国の医学留学生や華僑に協力や義捐を求めた「千葉同学全体組織赤十字会回国敬求留日学界商界諸同胞賛成助捐啓」のことでありと思われる。この史料は、外務省外交史料館蔵の「清国革命動乱の際 在本邦同国留学生の動静取調一件」（3-10-5-19）に、檄文の現物が収録され、またそれを外務省職員が「摘訳」した文章も含まれている。檄文の写真版は前掲、見城「明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向」に、摘訳については、『留学生は近代日本で何を学んだのか』に収録している。
- 12 新聞紙上ではすべて、「徐梁」となっている。しかし、見城が「名簿」作成をした際、参考にした『長崎医学専門学校一覧』などでは、「徐樑」となっていた。よって、引用史料では「徐梁」とするが、本文中では、「徐樑」を用いる。
- 13 11月9日に千葉医専の全教職員・学生650名が壮行会を催し、その際、一人50銭の寄付をしたとされる（「在校清国留学生故国の急に趣く」『千葉医学専門学校学友会雑誌』55号、1911年、61頁）。
- 14 千葉を含めた東京周辺の医薬留学生が横浜を発ったのは、11月19日だった（前掲、『留学生は近代日本で何を学んだのか』、234頁）。
- 15 伍（1842-1922）は、中国近代の政治家、外交官。李鴻章の下で、駐米公使、外務次官を歴任。辛亥革命時には共和制に賛成し、革命政権代表として袁世凱との交渉を担当した（久保田文次筆『世界大百科事典』より）。
- 16 千葉医専では、赤十字活動を「文明の精神を発揮する所以」と激賞した荻生録造校長等が、11月1日から8日まで無料で応急医療技術講習会を行った（前掲、見城『留学生は近代日本で何を学んだのか』233頁）。
- 17 同社社長の鈴木天眼は、「アジア主義」的思想を有し、「革命派」支持を打ち出すなどしていた（栃木利夫「辛亥革命と鈴木天眼」『歴史評論』295号、1974年11月）。鈴木については、横山宏章『長崎が出会った近代中国』（海鳥社、2006年）も参照のこと。また、鈴木は、西郷史郎を特派員として、

- 中国へ派遣し、直に見聞した状況を詳細に報道をさせた（前掲、川島「長崎から見た辛亥革命」）。
- 18 千葉医専で行われた応急医療技術講習会については、註16で紹介したが、長崎医専でどのような「講話」が行われたかの詳細は不明である。
- 19 見城は、上掲書に、千葉医専留学生の名簿を作成掲載したが、この時期に「呉」姓は複数名いたものの、「呉和」という学生の名前はない。
- 20 ここには28名しか挙げられていない。「29名」の明示が間違っていたのか、欠落者が一人いたのか、現在では確認しようがない。
- 21 註5で触れたが、見城は、前稿「長崎医学専門学校・医科大学で学んだ留学生とその特色」で留学生名簿を作成している。そこにはこれら人物の入学卒業年、卒業後の職業などを纏めているので参考されたい。なお、その名簿と記事の漢字表記が異なっている者が複数いる。カッコ内で示したのは、見城作成名簿で採用した漢字表記である。
- 22 『東京朝日』1911年11月17日付「長崎医専生徒も加盟」は、「長崎医学専門学校在学中の清国留学生一同、千葉医学専門学校生徒と同行。十六日長崎発筑後丸にて帰国の予定なり」と伝えていたが、千葉は上記の理由にて、先発組にはなれなかった模様である。
- 23 2章担当坂本注：「黎元洪の股肱の臣である革命黨員」という存在は、当時の新聞記者に革命の領袖といえは黎元洪という思い込みがあり、それがもたらした記述であろう。当時、少なくとも日本には、現在の「辛亥革命」観とは異なる革命観が存在した事実を示唆しているように思われる。
- 24 1899年に中華料理店兼旅館として創業開始。中国留学生のため、安くてボリュームがあり栄養満点の「ちゃんぽん」を最初に考案した店とされ、現在に続く有名店である（陳優継『ちゃんぽんと長崎華僑—美味しい日中文化交流史』長崎新聞新書、2009年）。
- 25 劉香織『断髪—近代東アジアの文化衝突』朝日新聞社、1990年、を参照のこと。
- 26 見城「渋沢栄一による中国人留学生支援と日華学会」（町泉寿郎編『渋沢栄一は漢学とどう関わったか』ミネルヴァ書房、2017年）119～120頁。
- 27 「紅十字隊を餞す」『三越』1911年3月号（前掲、見城『留学生は近代日本で何を学んだのか』233—234頁）。
- 28 前掲『留日学生の辛亥革命』Ⅷ章「留日学生同盟中国紅十字隊」参照。
- 29 前掲書199頁。
- 30 前掲書212頁Ⅷ章「留日学生同盟中国紅十字隊」参照。また本稿第1章の一連の資料も参照のこと。
- 31 前掲『国旗・国家・国慶』58頁。
- 32 同書第二章「国旗をめぐる争い」参照。
- 33 王興科主編『辛亥革命歴史地図』（中国地図出版社、2001年）127頁。
- 34 中国史学会主編『中国近代史資料叢刊辛亥革命（六）』（上海人民出版社）収載。
- 35 唐啓華「北洋派と辛亥革命」（辛亥革命百周年記念論集編集委員会編『総合研究辛亥革命』岩波書店、2012年）547頁。
- 36 劉偉「“革命”還是“共和”：民国初年の辛亥革命紀念」（羅福惠／朱英主編『辛亥革命的百年記憶与詮釈（第一卷）』華中師範大学出版社、2011年）、29頁。
- 37 蔣海波「形象化された辛亥革命—マッチラベルから見る近代中国の社会変遷」（日本孫文研究会編『グローバルヒストリーの中の辛亥革命』汲古書院、2013年）166頁。
- 38 前掲、見城「長崎医学専門学校・医科大学で学んだ留学生とその特色」では、辛亥革命に関わった留学生の卒業後の職業などについて、参考にし得た史料の範囲ではあるが、ある程度示している。
- 39 たとえば、池子華・郝如一主編『中国紅十字会百年往時』（合肥工業大学出版社、2011年）は、池が

周小蓉との共著で「赤子情懷：辛亥革命中の留日医学団紅十字団」という2ページ半あまりの概要を記している。

- 40 ここに名前が挙がっているうち3人は、見城の調査によれば、すべて再び千葉医専に復学卒業をしている。すなわち、呉亜良は1913年に修了し、蘇州で病院勤務医となった。何煥奎は1914年に修了し、江西医学専門学校教官職に就いた。また田龍瑞も14年に修了し、湖南省長沙で病院勤務医になっている。残る一人の黄孟祥は、革命時には既に卒業帰国し、長沙で病院勤務をしていた（前掲、見城『留学生は近代日本で何を学んだのか』20～21頁）。

【付記】本研究は、JSPS科研費（2017年～2019年、基盤B・一般、課題番号17H02686 代表者 神奈川大学・孫安石）「教育の交流と東アジア国際関係—中国人留学生の派遣と支援」の助成を受けた成果である。